
東方飛翔録

星屑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方飛翔録

【Nコード】

N4806T

【作者名】

星屑

【あらすじ】

鳥達と話せるちょっと変わった主人公『不知火悠治』が、スキマ妖怪に連れてかれ、幻想郷入り

不運か幸運か そんな幻想郷を日々暮らしていく物語です。

原作と少しキャラの設定や性格が違ったりします。

感想を書いてくれると有り難いです。

初投稿なので、誤字などありましたら遠慮なく書いていって下さい。

一話：不思議な三枚のカード（前書き）

初めまして、星屑 です。

初投稿作品ですので下手かも知れませんが、良ければ見ていって下さい。

一話：不思議な三枚のカード

俺は不知火 悠治。

普通の高校通う普通の高校生だ。

俺は今、学校が終わり、何もすることもなく家に帰っているところだ。

さっき普通の高校生と言ったが

一つだけ俺には他の人とは違うところがある。

それは

「最近はずちらにとって住みづらい町になったわねえ」

「そうねえ、ビルとか多くなって自然が無くなってきたわね」

周りから話し声が聞こえる。ただし、会話しているのは「人間」ではない。

会話しているのは電線に止まっている2羽の「鳥」である。

そう、俺は鳥達の言葉が分かるのだ。何故言葉が分かるのかは俺でも分からない。昔からそうなのだから仕方ない。

「あらゆうちゃん、いま帰り？」

会話してた一人（性格には一匹だな）が俺に話し掛けてきた。

「ゆうちゃん言うな　あと、俺に話し掛けるな。後、周りから変な目で見られるだろ。　　ったく」

俺はそう急に言って、溜め息ついてから再び帰路についた。

「ただいまーっ」と

玄関の扉を開き、家の中に入る。妙に静かなのが気になり台所に入った。

「あれ？誰もいないのか」

いつもならこの時間には親がいるはずだが、今日に限っていなかった。

「ん〜 まあいつか、すぐ帰って来るだろうし」

俺は別に気になげずに、そのまま自分の部屋に向かった。

ドサア

部屋に入ったと同時に、鞆を投げ捨てベッドに倒れ込んだ。

「ハア〜 にしても俺にはこんな能力があるんだろ。つうか、なんで鳥だけ？それだったら、他の動物の言葉も分かればいいのに」

俺のこの変な能力は鳥だけであつて、他の動物の言葉は分からないのだ。

仰向けになりながら愚痴っていると、机のほうで何かが光った。

「ん？なんだ？」

俺は机向かうと何も描かれてない真っ白な3枚のカードが小さく光っていた。

「何だこれ トランプかなんかのカードか？ていうか、なんで光ってんだ・マジック用のやつか？」

疑問に思いながらも、そのカードを手を取った。

その時

「うわ！？なんだこれ」

カードが急に強く光りはじめた。
目をつぶる程度の光ではなかったが、それより驚いたことが、真っ白だったカードに文字が浮かび上がった。

「なんだよこれ！」

「やっぱり私の見込み通りね」

「！？、誰だ！」

急に後ろから女性の声が聞こえた。
今、家には俺だけのはずなのに、親の声にしては若い気がする。
俺は、声が聞こえる方向をを向いた。

そこには、目の前の空間が割れて、そこから髪の毛の長い金髪の女性が、扇子で口を隠して上半身だけ出していた。

「え？ え！？どうゆうことだよ？」

「まあまあ、慌てないで落ち着きなさい」

「落ち着いていられるか！人が、変なところから人が、空間が」
「だから落ち着きなさい」

「あ、ああ 分かった」

混乱している頭を整理しながら、彼女の言葉に従った。
(従わないといけないうって本能がそう言ってる)

「何か言ってたかしら？」

「いや、何も　（読心術でも使えるのか　？）」

「さて、本題に移りましょうか、不知火悠治君？」

「へ？なんで俺の名前を？」

一話・不思議な三枚のカード（後書き）

見てくださった皆さん、有難うございます。

今後も投稿してまいりますので、よろしくお願ひします。

二話：強制幻想入り〜巫女との出会い（前書き）

今回で幻想入りします。

二話：強制幻想入りく巫女との出会い

「本題に移りましょうか、不知火悠治君？」

「へ！？なんで俺の名前を？」

突然俺の名前を言われて驚いてしまった。誰しも見ず知らずの人に名前を言われたら驚く。

「なんでって、これを見ただけよ？」

そう言うと、俺の通っている学校の生徒手帳を取り出した。

なんだ、そういうことか　　そっぴゃ鞆、そこらへんに投げ捨てたっけ。

「それで、不知火悠治君？貴方には特殊な能力があるわね？」

「特殊な能力って言うと、鳥の言葉が分かるってやつか？あと、悠治でいいよ」

「そ、でもね悠治君、それはほんの一部の能力でしかない、だから貴方は　　」

そうゆうと扇子でヒョイト、縦に振って俺の真下に亀裂をいれた。

「ちよっ、おい待て何を！」

カパア

「幻想郷に招待します」

「なんだよ！幻想郷って？うわっ！？」

そのまま目がたくさんある謎の空間に落ちた。

「なんだよこれ！ってかあんた誰だよ？」

落ちながらも、何故かそれだけでも聞きたかった。

「私？私は八雲紫。覚えておいてね」

そう言ってウインクをする。それを最後に目の前が暗くなった。

「ん？」

俺が目を覚ますと、木々が大量にそびえ立つ森のような場所にいた。

「いつつ　ここは、何処なんだ？」

体のいたる所が痛い。特に背中が痛い。

背中を摩りながら、ここにいる経緯を思い出す。

「ええと、たしか」

家に帰った　家に誰もいない　自分の部屋に行く　光るカードがある　手に取ったら文字が浮かぶ　謎の女性がいる　幻想郷と言うところに落とされる　そして今

「てことは俺は今、幻想郷にいるってことか」

案外冷静に考えられた。なんやかんやで、八雲って人よりは、現実味があるしな。空間が割れるってどうよ

「ほんとどうなってんだ？全く分からん」

考えれば考えるほど分からなくなる。

「考えるのは後だ、一先ずここら辺を散策してみるか」

立ち上がり、土を軽く掃って茂みの中へ歩きはじめた。

（少年移動中）

そして数時間後

「完璧に、迷いましたな」

何と言うことだ、ここまで広いとは　しかも何回か同じ場所通つてる気がするし

「どうするか…建物らしき物も見当たらねえ、ここで一晩明かすのは流石に嫌だぞ」

かれこれ数時間森の中を迷っていたら、太陽がほとんど西に傾いていた。森の中というせいもあって、余計暗く感じる。

「これは、かなり恐いな　こつゆつのは少し苦手なんだよな」

少し焦りながら、森の中をさ迷う。

「ん？あそこだけ明るいな。行ってみるか」

草木をわけながら、光が差し込んでいる場所に向かう。

「なんだ此処は、神社か？」

森を抜けた所には、神社らしき建物が建っていた。

大きな社があるから多分神社なのだろう。建物の正面に賽銭箱もあるし。

「こんなところに神社があったのか。てことは人がいるかも知れないな」

少し安心しながら、人がいるか確認をしに、建物の方に向かった。

「誰かいませんか？」

「先ず声をかけてみる。」

「誰もいな「何か用？」わ！？居た！」

急に人が来てびっくりした。いつの間に居たんだ？

「居たとはなによ、失礼ね。神社に人くらい居るわよ」

「す、すまん」

「一応謝っておく。まあ、今は俺が悪かったな、うん。」

「で、貴方は誰なの？此処では見ない服装だけど？」

「えっと 俺は、不知火悠治。 訳あって此処、幻想郷 だっけ？、落とされたて此処に来た。」

とりあえず挨拶をしておく。

「なるほどね、私は、博麗霊夢。 此処、博麗神社の巫女。 そして幻想郷と外の世界の境界を維持する者よ」

「外の世界？」

博麗霊夢という少女はそう言った。
気になったので、質問してみる。

「簡潔に言つと、貴方が元居た世界のことよ」

「なるほどな」

「一先ず頷いとく。 てか頷く以外に返答しとかないと説明を聞くのが難しそうだ。」

フラッ

「おっと」

安心したせいか、疲れが急にきて、その場に座り込んでしまった。

「ちよつと！大丈夫？」

「ハハハ ちよつと足がふらついただけだ。 結構歩いてたからな」

「ほら、立てる?」

そう言つて霊夢は手を差し出す。

俺は「わりい」と言つてから、その手を掴んだ。

「!?!」

「ん?どうした?」

急に驚いた顔したので、聞いてみる。

「ねえ悠治、カードとか持つてる?」

カード?ああ、あの光つてたカードか。たしかズボンのポケットに

「これのことか?」

そう言つて3枚のカードを取り出す。

光つてはいなかったが文字はちゃんと書かれていた。

「やっぱり、それスペルカードね。」

「スペルカード?」

「そう、それは持っている人の能」「グウウウウウウウ」

え?」

俺の腹の音が鳴ってしまった。

とてつもなく恥ずかしい / / /

「ふふ 凄い音ね」

「笑うなよ！／＼／」

「ごめんなさい」

謝りながらも、霊夢はクスクスと笑っていた。

「そうね、もう日も落ちちゃってきてるし ねえ悠治、今日は泊まっていきなさい。どうせ行く当て無いんでしょ？」

「え？良いのか？」

「別に良いわよ。それとも妖怪に食べられたいの？」

「いえ！有り難く泊まらせていただきます！！」

それは流石に嫌だ。俺は即答した。

「よろしい。ほらこつちにいらっしやい」

霊夢は手招きをして俺を呼ぶ。

俺は霊夢の後を追って中へ入っていった。

二話：強制幻想入り〜巫女との出会い（後書き）

やっと2話完成しました！

霊夢の性格が変でしたかね？

主は東方シリーズ未経験者なので、どうも分からないところもあります。

質問等がありましたら感想の方へ。

三話・白黒少女と弾幕勝負（前書き）

書くの忘れてましたが、季節は夏です。

うーん キャラが変になってしまっ

追記：途中で三人称になっていますが気にしないで下さい。

三話：白黒少女と弾幕勝負

幻想入りして、早一日がたった。昨日、霊夢から色々聞かされた。幻想郷のこと。此処では、俺は外来人と言っらしい。

それと、俺は元の世界に帰れない可能性が高いようだ。何故かは知らないが、俺を戻せないらしい。まあ、気長に考えよう。後、俺の能力のこと。

「鳥を操る程度の能力」というらしい。だから、喋れたり、懐いたりしたのか。

そう思い出しながら朝食を終え、今は縁側で寛いでいる。

それと、俺はその話しの後、霊夢に此処に住まして欲しいと頼んだところ、「私の手伝いをしてくれるなら、良いわよ」と言ってくれたので、霊夢の手伝いをする条件で居候することにした。

「鳥を操る　ねえ」

以前も何かと好かれたり、俺の言うこと聞いたりしてたしな。庭の雀に手を向けて

「こっちに来い」

そう言うと雀数匹がこっちに来た。

「なんか用っスか？」

「飯くれえ」

「腹減ったあ」

「旦那あ、なんかねえか？」

こいつ等食い意地すげえな　まあ呼んじまったことだし。

「ほれ、これで良いか？」

ポケットから、袋に入ったちよつと古い米を庭に投げる。

『『あざーす！』』

そう言ってから米を啄んでいる。

「これ　使い道あんのかな？」

能力の使い道を考えていたら、だんだんと眠気が襲ってきた。

「この能力、何か　使えない　もの　か　すう　すう」

（ 霊夢 side ）

私は、博麗霊夢。幻想郷と外の世界の境界を管理する素敵な巫女よ。
（ツツコンだ奴、後で夢想封印ね）

昨日は外来人の不知火悠がやってきたわ。どうやら彼は、能力の持

ち主だったようね。手を触ったときに、強い靈力を感じられたしね。で、今は朝食終えて、境内を掃除している。悠治は食器を洗ってくれたので、休ましている。

「ま、こんなもんね」

一通りの掃除が終わったので、箒を置いて、その足で居間に向かい、お茶を飲むことにした。

「そういえば、悠治はたしか、縁側に居るって言ってたっけ」

湯飲みを2つお盆に乗せて、縁側に向かった。

「悠治、お茶が入ったわよ　って寝ちゃってる　」

そこには、寝息をたてながら、気持ちよさそうに寝てる悠治が居た。

「昨日は意外と冷静に聞いてたけど、なんやかんやで、悠治なりに色々考えてたのかしらね。寝顔　ちよつと可愛いじゃない」

自分で言っただけだが、なんでこんなこと言ったんだろ　恥ずかしい　／／／

そう言いながらも、悠治の頭を撫でる靈夢であった。

「悠治 side」

「ん」

頭に何か感触があり、それで目が覚める。

「あ、起きた」

「ん？ああ、霊夢…居たのか」

俺が目を覚ましたら、隣に霊夢が座ってお茶を飲んでた。頭触っ

てたのは、霊夢か

「お茶あるわよ？」

「おお、サンキユ」

そう言うってから、お茶を受け取り飲む。

「うん、美味しい」

「そう、ありがとう」

何気ない会話をしながら庭を眺める。

うん、平和だなあ。

その時

「お？珍しく霊夢以外に人が居るんだぜ」

突然空から、声が聞こえた。

そこには、全身黒色で白いエプロン付けていて、とがった黒い帽子、（いわゆる魔法使いが被っているような帽子）を被って、箒に乗っている少女が居た。

「あ、魔理沙、なんの用？」

魔理沙と言う少女は、ゆっくりと降りてきた。

「なんも用はないぜ。暇だったから来たただけだぜ」

そう言うってから、俺の方を向いた。

あ、ついでに言うと、霊夢から幻想郷は空を飛べる奴はいくらでも居ると聞いたので、別に驚いていない。

「で、あんたは誰なんだ？」

「俺は、不知火悠治。此处で言うと外来人って奴だ。今は、博麗神社に居候している身だ」

「へえ、外来人か、私は霧雨魔理沙よろしくだぜ」

魔理沙は手を出し、握手を求める。

「ああ、よろしく」

互いに握手をする。

「なあ悠治、暇か？」

「まあやることないし、暇だが」

「なら、弾幕ごっこやろうぜ」

前言撤回、平和じゃねえよ

弾幕ごっこ ルールは聞いている。

此处、幻想郷の決闘みたいなものだ。スペルカードを使い弾幕というものを出すらしく、スペルカードを使わなくても、出せるらしい。

「ちよつと魔理沙！貴女何言ってるの！」

悠治は確かに能力を持つてるわ。でも、彼は一度も闘ったこと無い

のよー!」

「大丈夫だって、ちゃんと手加減はするぜ?」

おいおい、何故やる前提で進めているのだ。でも、やってみる価値はあるな。

「で、悠治はどうするんだ?」

「ん〜、じゃあやってみるか」

「よっしゃー!じゃ、早速やろっぜ!」

すげえ喜んでるな、そこまでやりたかったのか。

「ちょっと悠治、本気なの!」

「霊夢、悠治の合意の上だぜ」

「霊夢、ありがとう。魔理沙も手加減してくれるし、だから大丈夫だろっ」

心配してくれてるのか、それとも危険だからなのかは分からないが、礼は言うておくよ。

「全く、しょうがないわね」

溜め息しながらも、許しを貰えた。

今回が俺の初めての弾幕勝負だ。
今、霊夢がルール説明している。

「いい、ルールはどちらかが一発でも当たったら負け、スペルカード使用は3枚まで、わかった？」

「オツケー」

「了解」

どちらも、頷いてから相手を見る。

「それでは、はじめ!!」

開始と同時に、魔理沙が高く飛ぶ。いきなり飛ぶってありかよ

「悠治、先手はもらったぜ!!」

そう言っただけでカードを出す。

「魔符『スターダストレヴァリエ』!」

カード名を永唱して、周囲に大量の星型の弾幕を放つ。

「いきなりめんどくさいの撃ってきやがるな」

体制を低くし、構える。

私は驚いたぜ。いくら手加減と言ってもスターダストレヴァリエを濃く撃った筈なのに、一発も当たらずにしかも、砂埃の中からスperlカードを放つなんて。

「まさか、私のスターダストレヴァリエを避けるなんてなでもなんで私の場所が分かるんだぜ？」

弾幕を避けながら悠治に問い掛ける。

「俺には見えるんだよ、見えなくたって魔理沙の居場所も弾幕も何となくな」

そう言いながら悠治は弾幕を放つ。

「でも、当たらなかつたら意味がないんだぜ」

悠治の弾幕を避けるが

ヒュンッ

「うわっと！なんだなんだぜ！？」

悠治が撃ってきた弾幕が周りを飛び回っている。

「初めて使ったが、なかなか面白い動きをするな。自由自在だ」

「まだまだいけるんだな、悠治は面白いぜ！」

弾幕を避けて反撃の体制に入る。

（悠治 side）

（ん〜今のが当たらないか まあ、彼女なら避けると思ったけど。）
悠治が心の中でそう言ってたら魔理沙が攻撃の構えをしていた。

「面白くなってきた！！いくぜ、悠治！魔符『スターダストレヴ
アリエ』！」

「同じ物は簡単に避けられるぞ！お次はこれだ！音符『ソニックバ
ード』！」

さっきの弾幕より大きめの鳥型の弾幕を作る。

「いつけえ!!」

自分の弾幕を魔理沙の弾幕にぶつける。
俺の撃った弾幕は、魔理沙の弾幕を消し去りながら進んでいった。

「おお 我ながら凄いな 弾幕を破壊しながら進むなんて
しかもかなり速い」

「ちよっ!そんなのありが!!」

「俺も初めて使ったスペルカードなんだ、カード名で弾速は速い
と思ったけど ズバリ的中だな」

さらに弾幕を撃ち続ける。

「うわっと!危ないぜ、こっちも負けていられないんだぜ」

魔理沙が大量の弾幕を撃ってくる。

「流石に、これはヤバいな」

これは濃すぎる なら当てるより、隙間を作るように撃った方が
良いかもな。

「弾幕はパワーだぜ!」

「うわっと!当たるかよ!」

弾幕を打ち消しながら避けていく。反撃ができなくなってきたな

「悠治！そろそろ決着をつけるんだぜ！」

魔理沙が小さな八角形の箱を前に構えた。これはまずいな
嫌な
予感しかない。

この最後の1枚に賭けてみるか。

「いくぜ、悠治！」

「恋符『マスタースパーク』！！」

八角形の箱から極太のレーザーが悠治に向けて発射される。

ズガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

マスタースパークが当たった地面が深くえぐれている。

「やったかだぜ」

「ちよつと魔理沙！やりすぎよ！」

「え？ あー！やっちゃまったああー！おーい悠治！大丈夫か！
？」

魔理沙が急いで降りてくる。

そのとき

「ったく あんなもんくらったら大丈夫じゃすまねえっての」

「「!？」」二人が、声のする方向を向く。

そこには、悠治がいた。

だが、そこは地上ではなく空中に浮いていた。

「悠治どうしたん」その前に ほいっと「？」

俺は魔理沙の帽子を取って頭に軽くチョップした。

「霊夢、勝負は決まったよな」

「え？ あ、ええ そうね。勝者不知火悠治！」

霊夢の掛け声で、この弾幕勝負は終わった。

「ったく こんな小せえ女の子があんなの撃つとは、思わなかったぞ？コノヤロー」

そう言っつて、笑いながら魔理沙の頭をワシヤワシヤと撫でた。

「わあゝ／＼／＼や、やめろゝ／＼／」

魔理沙は顔を赤くしながら、俺の手を退かそうとする。結構可愛いな。

抱きしめたいなあ、魔理沙!!

それやったら嫌われるので、やめとこつ。

「いい加減やめてくれ／＼／＼じゃなく　って！悠治、その翼はなんだぜ？」

「そうよ、悠治それは一体なんなの？
霊夢がこっちに飛んでくる。」

「これか？これはこいつのおかげだ」

そう言つて一枚のスペルカードを見せた。

「翼符『シルバーウィング』スペルカードの能力さ」

「へえ、スペルカードの能力か（ねえ）」

二人が物珍しい顔をして俺の翼を見る。普通はないのか？

「なあ、弾幕も撃てるのか？」

「多分な　あのさ、そろそろ降りて良いか？これ使つてると、
すんげえ疲れるんよ　あと肩貸してくれ」
かなりの霊力使ったからな、もうバテバテな状態　そろそろ効果
が切れるな

「ああ、ごめんなさい（す、すまないぜ）」

二人の肩を借りながら、ゆっくりと降りた。ちよつと情けなく感じるな

「にしても派手にえぐつたな　」

「魔理沙？分かってるわね？」

ちよつ霊夢の顔がマジ怖いんですけど…

「！！ わわわ分かってるぜ！ちゃんと元どつりに戻すから、怖い顔しないでくれ！」

「魔理沙、俺も手伝うよ」

「悠治、感謝するぜ」

半泣きするほどかよ どんだけ嫌なんだ

そのあと、少し休んだあとに、魔理沙と一緒に境内を修理した。

三話：白黒少女と弾幕勝負（後書き）

初の戦闘シーンものすごく難しかったです。

次回は悠治のステータスでも投稿しようと思っています。（すいません嘘です）

四話・赤い霧にそーなのかー（前書き）

今回から異変回です。

もう少し長く作りたいものですな

四話：赤い霧にそーなのかー

幻想入りして早一週間ぐらいがすぎた。

今夜は非常に寒い　てか赤い　目の前が赤い　なんで？

これはどうゆうことなのか　詳しくそんな人に聞くのが良さそうだな。

「これは異変ね……」

「異変？」

霊夢が異変について教えてくれた。

～少女説明中～

「成る程な、霊夢はこうゆう異変を解決しているんだな」

「まあ、そうゆうことね」

「で、その元凶は何処にいるんだ？」

「え？なんでそんなこと聞くのよ」

不思議そうにこつちを見てくる。

「どうせ霊夢は異変を解決しに行くんだろ？なら俺も行くよ」

霊夢は少し驚いた顔をした、だがすぐに真剣な顔で俺を見た。

「駄目よ」

「どうしてだー!!」

「この霧はね、幻想郷全体に広がっているのよ、これほどの範囲に霧を発生させることが出来るのは、かなりの強者だと思うわ」

霊夢が強い眼差しで見ってくる。本当に危険な事なんだな。 いや、分かってはいるけどよ

「それに戦闘が激しくなれば、貴方を守れきれないわ」

その言葉に少し苛立ったが、俺の力は弱いのは事実だ。だが

「なら、守らなくて良い」

「え？」

「自分の身は自分が守る、だからその異変を手伝わせてくれ」

「なんで！？なんで、そんなに異変に関わりたいのよ！」

必死に俺を止めようとする霊夢、その気持ちは有り難く受け取るよ。

「前に言っただろ？霊夢の仕事を手伝う事を条件に住ませるって、だからこの異変解決を手伝う」

「確かにそうだけど、それとこれはちが「それに！」！？」

「それに、俺はこの一週間何もやってない訳じゃない、自分なりに鍛練してきたんだ、だからお願いだ行かせてくれ！」

「そこまで言うなら、着いてきて良いわ、さっきの言葉は信じて良いわね？」

「ああ、だから心配しなくて良い」

不安な顔をしながらも霊夢は同行を認めてくれた。

「ごめんな」ボソッ

「何か言っただかしら？」

「いや、なにも」

「で、この霧の発生元は何処なんだ？」

「多分、湖の先にある吸血鬼の城が発生元ね、あの辺りが一番霧が濃いわ」

吸血鬼？吸血鬼ってあの血を吸う吸血鬼のことか？ 今更だが、

幻想郷は何でも有りですか。

心の中でそんなことを思いながらも、次の質問をした。

「吸血鬼の城ねえ、ここから約何分ぐらいだ？」

「大体、数十分程度かしらね、どうしてそんなことを？」

「俺が飛べるのは、精々頑張って十分が限界なんだ」

俺のスペルカード『シルバーウィング』は、一定時間飛ぶことができ、その持続出来る時間がこの一週間の修業で十分が限界だった。

「悠治、貴方のスペルカード連続で使えないの？」

「あのスペルカードは、使ったら大体一時間は使えなくなるな」

『シルバーウィング』はかなりの霊力を使う。だから使った後は、ある程度時間が経たないと発動出来ないのだ。この欠点がなけりゃ良いんだが

「だったらこれ使いなさい」

そう言っつて野球ボールぐらいの平べったく丸い道具を渡してきた。

「それは霊力を込めるだけで大きさや形を変える陰陽玉よ、試してみて」

言われた通りに霊力を込める。そうすると、陰陽玉が大きくなり反動で地面に落ちたが、地面スレスレで浮いていた。

「凄いな　大体一人分ぐらい乗れる大きさだな。戻すときはどうするんだ？」

「込めたときと、同じようにすれば戻せるわ。これがあればスペルカード使わなくなっつて移動することが出来るわよね」

「本当にありがとな、うし！行くか！」

陰陽玉に乗っつて飛び立とうとした瞬間

「あ、待って、その前にこれを渡しておくわ」

霊夢は一枚の白いカードを渡してきた。

「これって、スペルカードだよな？」

「そうよ、お守りの代わりに持っておきなさい」
スperlカードを受け取ったが、文字も何も出なかった。まあ、どう
でもいいか。

「よし、行くか」

「そうね、行きましょう」

俺と霊夢は霧の濃い吸血鬼の住む城に向かった。

博霊神社を出て、約二十分が経った。

ここら辺の森一帯は霧が濃く、五メートル先も見えない。

移動中に魔理沙と出会った。どうやら魔理沙も異変を解決に行くらしい。まあ人が多いに超したことはないからな。

「なあ、それはなんだぜ？面白そうだな」

魔理沙が俺が乗っている陰陽玉を、興味津々で質問してきた。

「霊夢がくれた霊力で形や大きさを変えられるアイテムだ」

「へえ、他にどんな形になれるのか？」

「分かんねえな、これ、さっき渡されたばかりだし、試してないからな」

「じゃあ、今度貸してくれないか？」

「ああ、別に構わないが」

「悠治、やめときなさい」

霊夢が呆れたような顔で、言ってきた。

「どうしてだ？」

「こいつに貸したら一生返ってこないから」

「霊夢、人聞き悪いこと言わないでくれ、私は借りたら返すぜ。
私が死んだらな」

「たしかに、一生返ってこないな」

苦笑いしながら魔理沙の言い分を聞いた。

「無駄話は、この辺にして先を急ぎましょう」

「そうだな」

先に行こうとしたとき…

「うわっと!?!」

突然目の前から弾幕が飛んできた。
弾幕が飛んできた方向を見ると、黒い球体が浮かんでいた。

その中から一人の少女が現れた。

「ねえ、あなたたちは食べても良い人間なのかー？」

「は！？」

出会い頭に何言ってるんだこの子は！？人を食べるってこの子は妖怪なのか？

妖怪って不気味な奴ばっかと思っていたが、普通の女の子と変わらないじゃないか。

「ねえ、食べても良いのかー？」

「そ、そりゃ駄目だな、まだ俺は生きていたいね」

「じゃあ、弾幕勝負で勝ったら食べていい？」

「悠治、ならさっさと倒して先に進みましょう」

霊夢は札を構えて戦闘体制にはいる。

「いや、此処は俺がやる。霊夢達は先に行ってくれ」

「大丈夫なのか？」

「大丈夫だって心配すんな、後から追いつくからよ」

「分かったわ。魔理沙、行くわよ」

「悠治、無理は禁物だぜ？」

「ああ」

霊夢達を見送ってから、少女を見た。

「じゃあ、お兄ちゃん、いっくよー!」

「おっと、その前に君の名前は?」

「ルーミアだよ」

「俺は、不知火悠治。それじゃルーミア、俺が勝ったら食つのを諦めるよ」

「わかったー」

つつても話しながら弾幕避けるのは、キツイな 何発か当たりかけて服が破けちまつたし。

「お兄ちゃん凄いな、ならもつといくよ」

「闇符『デイマーケイション』!」

ルーミアは周囲に弾幕を放つ。俺は弾幕を見極めながら避ける。

「そんなんじゃないよ、俺を倒せないよ?ルーミアちゃん」

「そーなのかー！じゃあ、もつといくよー！」

俺が避ける位置に、青い弾幕を撃ってくる。

「おっとこれは、まずい 鳥符『エアロバースト』！」

俺の弾幕をルーミアの弾幕にぶつけ、相殺し、続けてルーミアの方に撃つ。

「お兄ちゃんの弾幕、鳥みたいでおいしそう（ジュルリ）」

「こらこら 今戦っているんだから、弾幕を食べようとするな
それに余裕はそこまでだ、周りを見なよ」

「え ！？」

ルーミアの周りには、俺の弾幕が旋回しながら飛び回っている。
前に魔理沙に使ったやつよりも密度を高めて撃つたため、ルーミアも逃げにくいだろ。

「この！この！！」

ルーミアは弾幕を撃って脱出を試みるが、密度が高いため隙間がでない。

「さすがに逃げきれないか、このまま圧縮！終わりだ！！！」

ルーミアの周りを飛ぶ弾幕を一気に中心目掛けて飛ばす。

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

爆発音が鳴り、ルーミアのいた場所に、煙が漂っている。

「やばい やりすぎたか ルーミア大丈夫かな？」

心配していると、ルーミアが力無く落ちていった。

「やばー!」

慌ててルーミアを助けに向かう。

「くっ 間に合えー!!」

「危ねえ　もう少しで森の中に落ちるところだった」

なんとか地面に落ちる前にルーミアをキャッチすることができた。

「ダメージはそんなに無いはずだから、びっくりしてそのまま気絶しちゃったのか」

今のルーミアは、お姫様抱っこの状態で眠っている。

「このまま置いていくのは　いや、危ないからやめておこう
仮にも女の子だし、俺がやりすぎたのもあるからな」

いくら妖怪でも、女の子を森の中に置いていくのは罪悪感がある。

「目が覚めるまでこのまましておくか　さて霊夢達を追っかないと」

ルーミアをお姫様抱っこしたまま霊夢達が向かった方へ飛んだ。

四話・赤い霧にそーなのかー（後書き）

今回の戦闘は短すぎですね　自分はまだまだですね

次回からは長く出来るよう努力します！

五話・氷の妖精（前書き）

誤字がありましたので直しました。

今後は無いよう気をつけます。

五話・氷の妖精

（湖上空）

「……さ、寒い……」

今、湖の上空を飛んでいるが、この寒さは霧のせいじゃないな……さつきはこんな寒さは無かったぞ……

「湖の上を飛んでいるからか？ いやそれにしては寒すぎる……上着あつて正解だったかな」

ちなみに、この上着は数日前に魔理沙が某何でも屋に連れていって貰ったときに買った品物だ。

あと、ルーミアはまだ起きてはいない。
重くないから腕が全く疲れないし、良いけど。

「霊夢達はもう吸血鬼の城に着いたかもしれないな、先を急ぐか」
寒いし遅れを取り戻さないといけないからな

と思いつつ急ごうとしたとき……

「そこのおまえ……」

湖の方から声が聞こえた。

そこには、青と白の服、水色の髪を水色の大きなリボンで縛っている小さな女の子がいた。

それに、背中に羽のようなものはやっている。てか誰？めんどくさそうだな

「すみません。急いでいるので」

そそくさと、その場を立ち去ろうとしたとき…

「お前もあたいを無視するか!!」

「お前も？」

「さつきも紅白と白黒のやつもこのさいきよーのあたいを無視したんだ!!」

紅白と白黒つて霊夢と魔理沙のことを言ってるのか？霊夢達、この子スルーしていったのか。俺もそうしたい。てか自分で最強で言うかよ…

「で？俺に何か用？」

「あたいと弾幕勝負しろ!!」

「え？なんで君と戦わなきゃいけないんだよ」

「あんたを倒してあの紅白達に、あたいをさいきよーだって分かってらせてやる!!」

おいおい…なんでそうなるのさ、それにルーミアを抱えてるから余裕がないし…

「俺さ、本気で急いでんだ。
だからそこをどいてくれないか？」

「なら、あたいに勝つたらここを通って良いわ！もっとも、さいきよーのあたいに勝てるわけないけど」

自信満々に言っているが、自分で最強と言ってる奴に負ける気がしねえ…

でもここで戦わなかったら、本当にめんどくさいことになる気がする。

「ねえ、あんたが抱えてるのルーミアちゃん？」

「ん？ああ、俺が少しやり過ぎて気絶しちゃったんだ。悪いことしたな、ルーミアには…」

「あたいの友達になんてことを…ゼツツタイにあんたをぶっ倒す！！」

「え？ちよつ、友達だったのか！？うわ！待てって、弾幕撃つなルーミアに当たるって！！！」

青い女の子が俺に向かって、氷の弾幕を連打してくる。完璧に俺しか見えてねえ

避けた弾幕は湖に当たり、凍り付く。当たったらヤバいな…

「ふん！！あたいの攻撃に手も足も動けないのね！」

「……それを言うなら『手も足も出せない』だろ…確かに、ルー

ミアを抱えては何も出来ないな…」

「う　うるさい！！お前はここで、あたいに負けるんだから！！」
ルミアを抱えている以上、弾幕も放てないし、逃げ続けないとルミアに当たるかもしれない…

「逃げるな！氷符『アイシクルフォール』！！」

ルミアside

…なんだろう、すごくあたたかい…　でもときどき冷たく感じる

「…ん？」

私は、冷たさで目が覚める。

「あれ？悠治お兄ちゃん？なんでいるの？」

目の前にさっきまで戦っていた悠治お兄ちゃんの顔があった。

「お、ルーミア、目が覚めたか。悪いがもう少しそのままになるからな」

？そのまま？

私は自分の体制を見た。

「!?!?!」

私はお兄ちゃんの腕に乗った状態、いわゆるお姫様抱っこ状態である。

「ちょっとお兄ちゃん、恥ずかしいから放して!!」

悠治の腕の上でルーミアがジタバタと動く。

「分かったから、暴れるな。君の友達の弾幕が当たるから!」

「え？」

弾幕が飛んでくる方向を見る。

そこには、怒った顔をしたチルノちゃんがいた。

「チルノちゃん!!」

〈悠治Side〉

「チルノちゃん!!」

ルーミアが青い女の子に向かってチルノと言った。あの子チルノって言うんだ。

「ルーミアちゃん、待ってて今すぐ助けるからね!」

え?なんで俺、悪役にされてんの?

「なあ、ルーミアからもなんか言ってくれよ」

「じゃ…ひとまずおろして／＼／」

やっとチルノの弾幕が止まったので、（何故か）顔を赤くしたルーミアをおろす。

「ねえチルノちゃん、悠治お兄ちゃんは悪い人じゃないよ。気絶して落ちそうになった私を助けてくれたんだよ？」

「でも、そいつはルーミアちゃんに攻撃して危ない目にあわせたんでしょ！」

「そ…そうだけど…」

必死にチルノに説明したが、正論言われちゃどうしようもないわ…

「いいよルーミア、どのみち戦わないところから進ませてくれな
いからな。」

「そうだろ、チルノ」

「そ、そーなのかー？」

「そうよ！あたいに勝つたらここを通らせてあげるわ」

チルノが再びスペルカードを構える。

俺もスペルカードを構えて、戦闘体制をとる

「ルーミア少し離れてろ、流れ弾が行くかもしれない」

「分かった」

ルーミアが離れたのを確認して、スペルカードに力を込める。

「いくぞ！鳥符『エアロバースト』！」

「くらえ！氷符『アイシクルフォール』！」

チルノが先程と同じ弾幕に俺の弾幕をぶつけて、打ち消す。球数はこっちが少し上かな？
少しずつチルノを追い込んでいく。

「そんなもんじゃ、あたいには当たらないよ！」

何発かチルノに当てようとしたが、チルノは軽々と避ける。

「やっぱこれだな」

自分の飛ばした弾幕に、意識を集中させる。

「困め！！」

弾幕をチルノの周りに飛び回せる。

「それがどうって言うのよ凍符『パーフェクトフリーズ』！」

チルノは俺の弾幕を消し飛ばし、色鮮やかな弾幕を全体に放った。

「そんなもんじゃ当たらないな」

弾幕の動きを予想しながら避けていたら、突然弾幕がその場で停止

した。

「やば、以外にめんどくさい
道を開けるか」

姿勢を立て直して、次のスペルカードを構えようとしたとき、停止
していた弾幕が動き出した。

「やっぱりあたいたらさいきよーね！」

勝ち誇ったように、腰に手をあて「どうだ！」と言わんばかりに仁
王立ちした。

でっかい隙をつくったな　ここで決める！

「音符『ソニックバード』！！」

チルノの弾幕を消しながら、チルノ目掛けて飛んでいく。

「嘘！あたいがやられる!?!」

ズドドドオオオオン

全弾チルノに当たり、周りにあつた弾幕が消える。

「まだだよ　まだ負けてない」

そこには、息切れしながら立つチルノがいた。

「あたいはまだ戦える！！」

スperlカードを構えて戦闘体制をとつたが　ポンッ

「チルノ　もうおしまいだよ」

チルノの頭に手を軽く乗せた。

「え！？いつの間に後ろに？」

さっきまでの睨んだ顔から、驚いた顔をしてこっちを向いた。

「いや、またルーミアみたいになったら嫌だから助けようと駆け寄ったんだけど、そしたらチルノがいたからさ

なあ、これは俺の勝ちかな？」

「ううう　どうやらあたいの負けだね

悠治って言ったっけ？さいきょーのあたいに勝つなんてあんた、さ

いきよーね」

「ははは それはどうも」

小さく笑うと、チルノもつられて笑う。

「チルノちゃん、大丈夫なのかー」

ルミアが心配してこっちに飛んでくる。

その後、チルノは俺のことを許してもらえた。

「なあチルノ、霊夢達はどっちに行つたか知ってる？」

「えつとね 「チルノちゃん」あ、大ちゃん」

大ちゃんと呼ばれる子が、こっちに飛んできた。

「もうどこ行つてたの？湖に行つたと思つたらなんか妙に広いし、チルノちゃんはどっかに行つちやうし」

来るなりチルノを叱つたり愚痴つたりしていた。

話しについていけないのですが

「それで貴方は？見かけない顔ですが」

「俺は外来人の不知火悠治だ。悠治で構わないよ」

「悠治さん外来人の方なんですか、私は大妖精だいようせいって言います
皆から、大ちゃんって呼ばれてます」

「じゃあ、大ちゃんって呼んで良いね」

「はい、良いですよ」

「あ、悠治！飛んで行った方向はね
えっと あっち！」

大ちゃんと一通りの挨拶を終えた後、チルノは霊夢達が向かった方
向を指差した。
だが、指差した方向はたしか

「そっちって博霊神社がある方向じゃ？」

「あれ？違った？」

薄々気づいてたんだけど、チルノって馬鹿だよ

「もう違つでしょ」

悠治さん、霊夢さん達は向こうに行きましたよ」

「おおそっか、ありがとな」

「もしかして悠治さん、霊夢さん達と異変解決しに行くんですか？」

「ああそうだが？」

「行かないほうが良いですよ！」

あの館には時を止めるメイドとその主、吸血鬼「レミリア・スカレット」がいるんですよ！」

大ちゃんが血相を変えながら、俺を止めようとする。まあ、霊夢にも最初止められたし仕方ないか。

「大ちゃん、これは俺の意志で異変解決に参戦しているんだ。危険なのは知っているし、吸血鬼がいるのも知ってる。時を止めるメイドは知らないけど、早く追いついて霊夢の力になりたいからさ」

大ちゃんを安心させようと、笑顔で頭を軽く撫でる。

大ちゃんも落ち着いたらしく、大きく深呼吸する。

「分かりました、そこまで言うなら止めません。ですが悠治さんは人間なんですから無茶はしないようにした方が良いでしょう。命は一度つきりなんですから」

「大丈夫だよ大ちゃん、悠治はあたいに勝ったんだから死なないよ」

「わはー、そーなのだー」

「 うん、そうだね」

こんな小さい子に俺は勇気付けられちゃったな。
これは意地でも死ねないな。

「三人ともありがとな、それじゃまた」

三人に手を振って別れを告げ、霊夢達を追った。

五話・氷の妖精（後書き）

次回は誤字がないようにします。

すいませんでした。

六話・門番さんと七曜の魔法使い（前書き）

今回は悠治は戦いません。

いろいろやっちゃまったかん満載です。

最初に言っておきます。

まことに申し訳ありませんでした！！

今回作者は暴走しました。

六話：門番さんと七曜の魔法使い

三人と別れて少し経った頃。

「あれが吸血鬼が住む館か」

俺が霊夢達を追っていると、遠くの方に建物のようなシルエットが見えた。

近づくと、かなり大きく全体が血のように赤く不気味で、まさに吸血鬼が住んでいると言わんばかりの館だった。

「立派な門があるな、こつゆつのはって門から入るのが礼儀だよな」
門の手前で降り、乗ってた陰陽玉の霊力を自分に戻し、小さくして締まっておく。

「その貴方、止まりなさい」

門に向かおうとしたら、目の前に女性が現れ呼び止められた。

見た目は俺より年齢が上っぽいな。
赤い髪に緑のチャイナ服が似合う。
緑の帽子を被り、真ん中に星の飾りがあり、「龍」と書かれている。

まあ、見たまんま接近戦が得意そうな容姿だな。

よく見れば、服が所々破けていて、僅かだが息切れを起こしている。

「貴方もお嬢様を止めに来たのですか？」

「貴方もつてことは、霊夢達はもう館の中なのか」

「ええ、そうですね。私が止めようとしたら、いきなり攻撃してくるなんて酷いですよ。私は危ないから止めようしたのに」

前から思ってたが、霊夢達って本当に怖いな　以前、妖怪が霊夢の目の前を通り過ぎただけでピチュらせてたし

「あんたは、ここの主に従えてるんじゃないのか？」

「そうですよ。この紅魔館の主『レミリア・スカーレット』に従えている、紅美鈴ほんめいりんと言います」

「俺は不知火悠治、それで美鈴さん、それでここは通してはくれないかな？」

「　　」
「ぶるぶる」

なんかぶるぶるいつてるんだが　俺、気に障ること言いましたか？

「　　」
「れた」

「え！？あ、すみません！！俺、変なこと言いましたか？」

「　　」
「言われた、初めて　名前で言われた　私を名前で言われた

！！」

「え??？」

初めて名前で言われた？
てか、なんで名前で言われなかったんだ？

「私を美鈴って言うてくれたの不知火さんが初めてですよ」グスッ

「ちよっ、泣くなよ

ほらこれで拭いて」

偶然持っていたハンカチを美鈴さんに渡す。

「すいません、今まで会った人は私のこと中国って言われてたので嬉しくって

レミリアお嬢様にも言われたことなかったですから」

そのレミリアお嬢さんは、ひでえな 仮にも従者を名前では呼ばないとは

「話を戻すが、ここを通してはくれないのかな？」

「だから駄目です、今行ったら確実に死にますよ？不知火さんは人間らしいですし」

「でも俺は、行かきやいけないんだ。

霊夢達に約束したんだ、後から追いつくって」

「貴方は馬鹿ですか？命より約束の方が大事なものなんですか？」

「少なくとも、俺の中では約束の方が大事だな。
もう約束は破りたくない」

少し嫌な過去を思い出し、それを消し去るように顔を振った。

「できれば通してくれると有り難いんだが、貴女とは戦いたくはないな」

「もう知りません、貴方になにを言っても止められそうにありませんね」

「良いですよ、どうぞお入り下さい」

ため息を吐きながら、門を開けてくれた。てか、こんなでかい門をよく片手で開けるな。こりゃ戦ったら本気で命が消えそつだ

「ありがとうございます。それとそのハンカチ、あげます」

美鈴さんに一つお礼を言って、門の奥の扉に向かった。

〔紅魔館 玄関口〕

いやあ、外からは不気味だったけど、中はそこまで不気味って感じじゃないね。

赤いけど

そして

「廊下広!!」

どうゆうことなんだ!?!外からみた館と内部の面積がまったく合っていないぞ!

「これは使うしかないな 使わずに行けるとおもって締まったのに」

さっき締まった陰陽玉を取り出し、霊力を込め、目の前に投げる。

ブワン

「よつと」

大きくなった陰陽玉に飛び乗り、少し浮く。

「さて、二人は何処にいるのやら」

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオ

遠くの方から衝撃音がなり、館全体に地鳴りが鳴る。

「こんなのやるのは魔理沙かな？」

場所は あっちか」

魔理沙と予想しながら、衝撃音が鳴った場所に飛ばした。

〈紅魔館 図書館内〉

〈魔理沙 Side〉

「へえ、やるじゃないか、フルパワーじゃないけど私のマスター
スパークを避けるなんてな」

「魔理沙もなかなかやるじゃない、でもそれは、もう撃たせない
わ」

霊夢と別行動になり私は、一先ず片っ端に扉を開けていたら、偶然
図書館のようなどこに出て、その後魔法使い「パチュリー・ノーレ
ッジ」に出会い今に至ってる訳だぜ。

「ならやってみるんだな！パチュリー！」

星型の弾幕を放ち、パチュリーの動きを止める。
今のうちに決めるぜ！

八卦炉を構え、霊力を溜める。

「そんなものじゃ足止めにもならないわ
日符『ロイヤルフレア』！」

私の弾幕を消しながら火のように赤い弾幕が、私に迫って来る。

「うわっと！危ないぜ」

八卦炉を構えるのをやめ、回避行動をとる。

「そつちに気を取られすぎよ」

パチュリーは魔導書らしき本を開き、永唱を唱え、スペルカードに重ねて弾幕を放ってきた。

でもそのくらいじゃ、私のスピードで十分避けられる！

さらに

「魔符『スターダストレヴァリエ』！」

ある程度回避した後、スターダストレヴァリエで残りの弾幕を打ち消す。

「まだまだこれからだよな！」

「本当ね　これ以上は図書館がもつかどうか」

（悠治 Side）

「だんだんと音がでかくなってきたな、もうすぐか」

遠くから聞こえていた音が、近くから聞こえるくらいになっていた。

「おっと、ここから聞こえるな」

他の扉と比べて、あきらかに大きい扉から爆発音などが聞こえる。

陰陽玉をしまい、扉を開ける。

ギギイイイイイイ

扉を開けると、そこらじゅうに本が散乱し、あわあわと効果音が出ているような慌ただしい少女がいた。

「！？誰ですか！（ボカ）こあっ」バタッ

今のは上から本が落ちて、あの子の頭にぶつかったのだ。

「こあゝ」

「なにやってんだか おい、大丈夫か？」ペシペシ

目を回しているこの子の頬を軽く叩いて、目を覚まさせる。

「ん？」

「あ、目が覚めた

頭の方大丈夫か？結構音がしたからな」

「え、あ、はい って貴方は誰なんですか！貴方も侵入者ですか！」

俺と距離を取り、威嚇する目でこちらを見る。

「一応、許可はもらって入ってきたんだがな。目的はこの紅霧を止めてもらおうと思っている」

「お嬢様を止めに？無理ですね

人間の貴方にはお嬢様に勝てる訳がありません」

「何も俺だけが戦う訳じゃない、霊夢や魔理沙と一緒に戦うんだからな」

俺がここまで来れたのも仲間がいてくれたからこそなんだよな。

「それに約束したからな」

「約束？」

「ああ、『後から追いつく』、こんな小さな約束でも、俺にとっては大事なことなんだ」

「貴方っておかしな人ですね」

「そんなに変か？」

彼女がクスクスと笑う。

俺、変なこと言った覚えがないんだが。

「???まあいいや、俺は不知火悠治、君は?背中の羽を見ると人間ではないね」

「はい、私は小悪魔、名前の通り種族は悪魔です」

今度は悪魔か 妖怪といい妖精といい、幻想郷はいろんな種族がいるな。

次は、幽霊とか死神とかが現れんのか?

「ん?おお!悠治、やっと追いついたか」

「この口調は」

声のする方向を見ると、筭にのった少女がいた。

「やっぱり魔理沙か、霊夢はどうした？」

「霊夢とは別行動だぜ」

あと、加戦は無用だからな」

「よそ見してつとやられるぞ」

「え？うわつと！！」

よそ見をした魔理沙が体制を崩しながらも、弾幕を避けている。

「もうすばっしっこいわね」

「私の速さは幻想郷一だぜ！」

たしかに速いな、体制崩していたのにもう復帰してるし反撃の準備も出来ている。

「魔符『スターダストレヴァリエ』！」

「同じ攻撃は効かないわよ？」

少女は魔理沙のスターダストレヴァリエを簡単に打ち消し、周りに煙ができる。

「あまいわ、敵に同じ技が効くわけ」お前のほうがあまいぜ！」
「いつの間に！」

魔理沙は、煙を利用し一気に相手との距離を縮めていた。

「この距離なら外さないぜ！おりゃあ！」ドガッ

「くっく」

魔理沙の蹴りが入り、少女が真下に落ちる。

「これでおしまいだ！これが私の全力全開フルパワーだぜ！」

魔理沙は、八卦炉を構え、霊力を一点に集める。

「くっく　こんなじゃ終わらないわ、火水木金土符『賢者の石』！」

う　ゴホッゴホッ　」

「パチユリー様！！」

「おいどうしたんだ！急に咳込んで」

「パチユリー様は元々体が弱い方なんです！

あの状態では！！！」

まずい　魔理沙は全然気付いてない、このままじゃ、あのパチユリーって子に直撃する！

「恋符『マスタースパーク』！！！」

「パチユリー様！！！」

「くっく」

ドガガガガアアアアアアアアアアア

「はあ はあ どんな結界なんだ 私のマスタースパークで周りが壊れないなんて」
肩で息をしながら、ゆっくりと降りてくる。

「おい悠治、終わったぜ」

魔理沙は悠治がいた場所に声をかけるが、悠治の姿は無く、青ざめた小悪魔がいた。

「おい、小悪魔って言ったか、悠治はどうした？もう先に行った

のか？」

「パ パチユリー様の方に」

「え！？なにやってんだあいつ！」

魔理沙は急いでマスタースパークが直撃したところに向かった。そこには、パチユリーを抱えた片方だけ翼をはやしている悠治がいた。

「ゴホツゴホツ　なんで助けたの？」

「あのままくらってたら、あんたは生きていたか分からなかったし、しかも無防備だったろ？」

小悪魔！こつちに来てパチユリーを運んでくれ」

「あ　はい！」

小悪魔はパチユリーを奥に運んでいった。

〈悠治Side〉

「ふう　　—先ず解除つと」

片翼になったシルバーウィングを消した。

「なんで、敵を庇ったんだ？」

あいつは魔女だぜ？あれをくらったって死にはしないぜ」

「それを本気で言ってるなら魔理沙、ちょっと来い」

魔理沙が不思議に思いながらこっちに来た。

「なんだぜ？」

バチンッ

俺は魔理沙の頬を叩いた。

「!?!」

魔理沙は何が起きたか分からない目をしている。

「お前な　もしあれで相手が死んだらどうすんだ！それで悲しむ人がでる、それをどう責任を取るんだよ!?!」

「だから、魔女だから死なないって」

「そうゆう意味じゃねえ！」

死ぬ死なないじゃなくてな、傷付いて悲しまねえ奴がいるわけねえんだよ！！

それともお前は仲間が傷付いても悲しまねえのか！？」

「それは、悲しいぜ 今も 悠治が、私のせいで傷付いたのが

ごめん 私のせいで 悠治が 本当に ごめん」

魔理沙は顔を伏せ、その上から帽子で顔を隠す。

「わりい 言い過ぎた 俺は大丈夫だし、あの子だって大怪我せずに済んだし、魔理沙も怪我をせずに済んだからな だから顔を伏せるなよ」

「ごめん それは ちょっと 無理」

「魔理沙」

俺は魔理沙を抱き寄せた。

「え！？／＼／＼」

「自分を責めすぎるな、魔理沙は心は強い。でも、溜めすぎるなよ？泣きたいときは泣け、俺が全部受け止めるから」

「悠治 う、うわああああん」

「良いぞ、全部吐き出せ」

俺は、魔理沙が泣き止むまでずっと抱き寄せていた。

六話・門番さんと七曜の魔法使い（後書き）

もうほんとに申し訳ありません。

なんか言われる前に幾つか書いときます。

Q・悠治の過去とは？

A・過去編をやりたいくてやってしまいました。

Q・魔理沙にフラグ？

A・完璧にそうになりましたね 何をやってんだ俺は

まだまだおかしいなと思う所がありましたら言ってください。最善を尽くします。

というかまず、自分を修正したいです

七話・時を止めるメイド長（前書き）

更新ペースはこのくらいですかね？

一週間内に投稿は流石に無理な気がします

ともあれ、第七話、投稿です。

七話：時を止めるメイド長

「どうだ、落ち着いたか？」

俺の胸元で泣いていた魔理沙が、落ち着いたのでゆっくりと離す。

「うん ありがとう」

そう言うが、なんで顔を隠したままなんだ？

「どうした？本当に大丈夫か？」

「大丈夫だって、ほら早く行こうぜ。霊夢が先にこの異変を起こした吸血鬼の元に向かっている筈だぜ」

「あ、ああ」

魔理沙は俺に顔を見せずに、背中を向け、先に飛び立った。

〔魔理沙 Side〕

〔紅魔館 廊下〕

なんでだろう 悠治の顔を見れない
別に、泣いて目が赤いからとかじゃなくて、悠治を見てると顔が熱
くなって見れない

「おい、本当に大丈夫か？
まさか顔に傷でもあるのか？」

横から悠治が、私の顔を覗いてきて、彼の顔が視界に入る。

「ひゃ！／＼／
だ、大丈夫なんだぜ／＼／」

慌てて顔を逸らす。

「なあ、本当に傷なのか？
それとも俺が叩いたのが」

「ち、違う！あれは私が悪いんだから、叩かれても仕方ないんだぜ！」

慌てて悠治を、フォローするように手を横に振る。
その拍子で、悠治と目が合う。

「魔理沙、そのままにいるよ」

「あ／／／」

悠治の顔が、目の前まで来ている。
ち／／／近いつて／／／

「ん、大丈夫だな

よかった 叩いた所は赤くなってないな、魔理沙みたいな綺麗な顔に傷でも付いてたら、どうしようかと思ったよ」

「！？／／／」

こいつ 素で言ってるのか？それともわざと？

「なんだ？？急に赤くなって、熱でもあるのか？？」

プ
ッ
ッ

「わっ／／／」

悠治が私の額に、手を当てる。

こいつ 絶対に素だ。素で言ったんだ

「別に熱くはないよな？」

「だから大丈夫だって／＼／

ほら、こんなところで油売ってないで早く行こうぜ／＼／

グイッ

私が先を急ごうとしたとき、悠治が私の腕を引っ張った。

（悠治Side）

「悠治！？／／／」

「魔理沙、お前がいた場所の床、見てみる」

「え？」

魔理沙が徐に、自分がいた場所を見る。
そこには1本のナイフが刺さっていた。

「よく避けたわね」

「生憎、俺の目は人より良くてな
でも、わざとだろ？俺が分かるように」

「どうしてそう思うのかしら？」

「ナイフが現れた場所が遠かったからな、どうゆう芸当か知らん
が、もつと近くで投げてる筈だからな
それでも、俺は魔理沙を守ろうとするがな」

俺は魔理沙を守るように前に立ち、魔理沙に告げた。

「魔理沙、先に行け、ここは俺一人でいい」

「お嬢様の所には行かせないわ」

突然目の前にメイドのような服を着た、銀髪の女性が現れた。その手にはナイフがあり、狙いは俺のようだ。

「あぶねっ！」

魔理沙を庇いながら横に飛び、攻撃を避ける。

「悠治、相手は手強いようだぜ

ここは二人で突破したほうが良いと思う」

「その方が良いな

でも、あの人のスピードを上まれるか」

「最後の話し合いは終わったかしら？なら始めましょうか」

彼女がナイフを投げってくるが、そのナイフの数がハンパなく多い。

「な！？どうなってんだ！」

「そんなことどうでもいいぜ！悠治、隙を見て攻撃してくれ！魔符『スターダストレヴァリエ』！」

魔理沙の攻撃でナイフが弾かれ、攻撃が通せるくらいの隙間が出る。

「今だ！ 鳥符『エアロバースト』！」

できるだけ隙間に、弾幕を通過するように放つ。

他はもちろん防衛用だ。

「私はね、貴方達の遊びには付き合うつもりは無いの、だからここで仕留めさせてもらうわ 幽幻『ジャック・ザ・ルドビレ』」
彼女が唱えると、さっきのナイフとは比にならないほどの数が現れ、さらに弾幕も放たれ、俺達の弾幕が消されていく。

「また増えた！？これじゃ埒が空かないんだぜ こうなったらいつそまとめて！」

「ま、待て魔理沙、迂闊にマスタースパークを撃つな！」

ミニ八卦炉を構えた魔理沙を慌てて止める。

「悠治！このままじゃ串刺しになるんだぞ！」

「分かってる、でもマスタースパークは使うな、今は避ける！」

俺と魔理沙は攻撃を避けるが、流石に数が多く何発かは体を掠る。

「(クツ どうすれば良いんだ 相手は間違いなく俺達を殺す気にいる、油断は出来ない)」

「メイド秘技『殺人ドール』 もう終わりにしましょう？」

またナイフが飛び交うがさっきまでのとは、規模が小さく避けやすい。

「どうした？もうばてたのか？」

これならスペルカードを使うまでもないぜ」

「まさか これはまだ序の口よ？」

彼女がそう言うと、またナイフが大量に現れる。

「（これだ、この攻撃の方法が分ければ、なんとかなる このトリックが分ければ）」

って、こりやまずいな 避けられない 音符『ソニックバード』
！」

弾幕を前方に放ち、自分の抜け道を作る。魔理沙の方に援護は出来ないが、彼女なら大丈夫だろう。

「くそっ 攻撃が激しすぎる」

「避けるのに、いっぱいいっばいだぜ」

俺も魔理沙も避けるのが精一杯だが、絶対に攻撃の機会があるはずだ。

「大人しく諦めたら？ 貴方達じゃ私には、勝てないわ」

「「諦めてたまるかああ！！」」

弾幕を一気に避け、二人同時に攻撃する。

「しまった！」

「「あつたれええ！！」」

攻撃をするも、間一髪の所で避けられてしまった。

「（今のを避けるか　でも、あの瞬間移動並の速さじゃなかったな　まさか）」

魔理沙、援護を頼む！」

「分かった　魔符『スターダストレヴァリエ』！」

魔理沙が援護してくれてる間、俺は確認したいことがある。

「間違いなければ良いんだが

鳥符『エアロバースト』！」

「時間差みたいなのをやるうとしたの？それじゃ、ただの一人ずつの攻撃でしかないわ」

俺はナイフを投げる彼女に集中する。

そのとき、彼女の手にかか光るものが見えた。

その瞬間、また同じようにナイフが大量に現れる。

「なるほどな、そうゆうことが

魔理沙、聞いてくれ」

「な、なんだぜ？手短に頼む」

弾幕でカバーしながら俺に近付く。

魔理沙もそろそろ限界に近いな　でもこれで決める！決めてみせる！

「何こそそそとやっているのかしら？

まあどうでもいいわ、これでお終いよ幻世『ザ・ワールド』」

俺達の周りに、ナイフ現れ、逃げられない状態になった。

「はあ！ 鳥符『エアロバースト』！」

「そんなものじゃ防げないわよ」

パチンと指を鳴らすと、更にナイフが増える。

「さようなら」

彼女がそう言うと、周りのナイフが俺達目掛けて飛んできた。

くメイドさんSideく

「どうやら終わりのようね」

別に私は、残骸を確認した訳でもなくそう言った。
何故なら、あの攻撃で生きている筈が無いからだ。

「さてと、後片付けでもしましょうか」

「誰が終わりだった？」

「!!!?!」

突然目の前から声がした。

「どうやって避けたのかしら？」

「簡単に言えば、自分の周りに弾幕を張っただけだ」

彼はそう言いつつも、顔に傷があった。

どうやら避けたと言っても、防ぎきれなかったものもあったようね。

「それじゃ、いい加減終わりにしましょ？」

「そう だな!!」

いきなり彼が私に突っ込んできた。
自暴自棄にでもなったのかしら。

「自分から死を選ぶなんてね」

「その気はさらさらねえ　よ!」サッ

私がナイフを構えようとしたとき、彼は突然、横に回避した。

「私から逃げようなんて甘いわよ?」

「甘いのはあなたの方だぜ!」

「!?!」

声がした方を見ると、八角形の道具を構えた白黒の魔法使いがいた。

「この距離なら外さないぜ」

「それはどう(ガシッ)!?!」

「悪いが能力は使わせない」

彼は、私の左腕を掴みながらそう答えた。

「な　どうゆうこと?」

「あなたの能力は、その懐中時計が必要って分かったんだよ、だからその行為を止めさせてもらった　チエックメイトだ!　魔理沙!このまま叩き込め!」

やばい　このままじゃ

負ける!!

「くられ！ 恋符『マスタースパーク』!!」

「くつ」

ズガガガガガアアアアアアアアアアアア

目の前が真っ白になり、その瞬間、私は負けたのだと理解した。

「お嬢様 申し訳ありません」

その言葉を最後に、目の前が暗くなった。

く???? Side

く紅魔館 ？？

ズズズズズ

「??」

上の方から大きな音がすると、周りが小さく揺れながら音を鳴らす。

「なんか楽しそうだな
そうだ、遊びに行っちゃおう」と

バキヤツ！

鉄格子を破壊して、外に出た。

「今度は『壊れない』で遊んでくれる人かな？」

七話・時を止めるメイド長（後書き）

次回もこのくらいか、更に遅くなるか分かりませんが、
気長に待ってくれたら有り難いです。

後、1・2話で異変解決ですかね。

八話：異変解決？（前書き）

異常に忙しいことが立て続けに起きてこんなに日が経ってしまいました。

時間をかけた割にはクオリティ低いです。すみません

八話：異変解決？

（霊夢Side）

「はあ はあ いい加減にしてくれる？、貴女じゃ私には勝てないわ」

「うるさい まだ私は負けを認めてないぞ」

私は今、目の前にいる異変の張本人、吸血鬼『レミリア・スカーレット』との弾幕勝負で勝ち、異変を止めるよう言っが、彼女は意地でも負けを認めないようね。

「この私が 貴様のような人間などに負ける筈がないのだ！！」

「そんな考えをしている時点で、貴女は負けているのよ！
第一に貴女は私に勝てないじゃない！」

「くっ この誇り高き吸血鬼の私に、人間風情が説教か ナ
メた真似を！！」

レミリアは、爪を立てながら、飛び込んできた。

「死ねえええ！！」

「いい加減に しなさい！！」

レミリアの腕を掴み、そのまま床に叩き付けた。

「ガハッ
」

「もう貴女も分かっているでしょ？
だから、この異変、諦めてくれるかしら？」

「
わかったわ
」

私は、レミリアの腕を離した。

レミリアは攻撃することもなく、その場に座りこんだ。

「ふう　　私の方は終わったわね、後は悠治達が来るのを待つだけね」

〈悠治Side〉

〈紅魔館 廊下〉

「よし、これで良いな」

気を失っているメイドさんを治療し、壁に凭れ掛かせる。

あ、ちなみに治療用の道具は、魔理沙が持っていた。
なんで帽子から出せたのかは、分からないがな。

「悠治は優しいすぎるんだぜ、敵味方なく助けるんだからさ」

「傷付いた人を放っておくのが出来ないだけだよ ツ」

立ち上がるうとしたとき、体に痛みが走り、その場に膝を付いた。

「悠治、無理するなよ？」

ここからは、私一人で行くから、悠治は休んでいたらどうだ？」

「そつちのほうが無理だな

それに、約束を守らなきゃな」

「馬鹿！なんで自分のことを考えないんだ！」

魔理沙を心配させないように笑顔を作るが、無理に笑顔をしている
せいで余計に心配させてしまった。

「さっきだって、下手したら悠治もくらってたかもしれないんだぜ！？」

「俺は魔理沙を信じているから　だから魔理沙もマスタースパークを撃ってくれた、それって魔理沙が俺を信じてくれてるってことだよな？」

「それは　そうだけど
でも私は、悠治が傷付くのが嫌なんだ！」

魔理沙が必死に俺のことを止める。
その彼女の目には、涙が溜まっていた。

「魔理沙　俺は誰かを守れるならこれくらいの傷、どつてことないんだ
だから俺のことは心配するな　ほら、早く霊夢を追わないと、行くぞ」

陰陽玉を取り出し、霊力を込め、大きくした陰陽玉に乗り、霊夢が向かったであろう方向に飛んだ。

「あ、悠治！」

魔理沙も、後を追うように飛び立つ。

少年、少女移動中

「なあ 悠治」

移動中に魔理沙が、話し掛けてきた。
俺は、そのまま止まらずに顔だけを魔理沙に向けた。

「ん？どうした、魔理沙??」

「あ／／いや その／／／
なんで悠治は、約束をそんなに大切にしているのかなって」

唐突に魔理沙がそんなことを聞いてきた。でも何故、顔を赤らめているのかは分からないけど。

「昔、大切な約束を破っちまってさ　それで友達を失ったんだ」

「ただの約束でか？」

「俺にとっては大切なことなんだ
もう　果たすことができない約束だったしな」

あの嫌な思い出は、記憶から消したいが、消せない　消してはいけないんだ

「もうこの話しはやめにしよう、こんなところで暗くなってもしょうがないからな」

「そうだぜ、でもその話し気になるな、異変が終わったら聞かせてもらっぜ」

「分かった 魔理沙には、特別に聞かせるよ」

こんなことは、人に話すものじゃないけど、彼女になら話しても良いと思えた。

〈紅魔館 大広間前〉

「どうやら、ここがラストステージみたいだな」

長い廊下を進みきったところに、他のとは違った形の扉があった。見た感じ、この館の主の部屋だろうか。

「でも、やけに広い感じだな」

「部屋と言うより、広間じゃないか？」

「ここだけ幅広いし」

「それもそうだな、よし行くか」

中に入ろうとしたら、魔理沙が俺の腕を掴んだ。

「魔理沙？」

「悠治 入る前に私と約束してくれる？」

「俺が守れるくらいのことならな」

俺の力じゃ、異変の元凶を倒すことは出来ない。

でも、誰かを守ることはできる。そんな約束なら俺でもできる。

「私は悠治を守る、だから悠治は、むりしないでくれ」

「それじゃ、俺は魔理沙を守る」

これで平等だな、俺だけ守られるなんて嫌だからな
後、霊夢もな」

「だから悠治は私が守るから良いんだぜ！」

魔理沙は必死に俺が戦うことを止める。

「魔理沙は俺を守るんだろ？なら安心して戦えるな」

それに、魔理沙もかなりボロボロなんだからな、無理すんなよ」

そう言って、魔理沙の額を軽く突いた。

「な／＼／　　全く、悠治は緊張感なさすぎだぜ　　／＼／」

「緊張し過ぎると、身体が動かなくなったりしたら意味ないからな
こうやって適度にほぐした方が楽になりぞ？
それじゃ、ラストステージに突入しますか！」

気合いを入れて扉を開けた。

ガチャン！

扉を開けた先に見えたのは、腕を組んで立っている霊夢と、座り込
んでいる小さな少女だった。
それに霊夢は、ものすごく嫌そうな顔をしてる。すげえ怖いんだけ
ど

「遅すぎよあんたら！」

「わ、わりい、いろいろあつてな」

「こっちはとっくに終わってるのよ！」

「本当に悪かったって！」

必死に霊夢に謝罪し、なんとか許してもらえた。

「全く いったい何をしてたのよ？」

「いやあ さ 俺らも戦ってたんだよ な、魔理沙」

「え？あ うん そ、そうだな / / /」

魔理沙、吃らないでくれ、フォローにならなくなるから。

「ねえ悠治、あんた、魔理沙になんかしたの？」

「いや、別になんもしてないが？」

「ふーん、まあいいわ、それならさっさと帰りましょっか」

霊夢が帰ろうとしたとき

ドゴオオオオオオオオオ

「「「「!?!?!?」」」」

突然床が壊れ、下から一人の少女が、出てきた。

「あはは、なんか楽しそうだね」

「フ、フランー!!」

フランと呼ばれた少女は、楽しそうな顔をしながら俺らを見ている。でも、『楽しんでる』と言う言い方が合わないな、どっちかって言うと

「『タノシンデイル』 だな」

「フラン！貴女、何故地下から出たのよ!？」

「だってこんな楽しそうなこと滅多にないからね、もったいないじゃん」

地下から出た？

てことは、あの子は幽閉でもされていたのか？

「まあ、今はお姉ちゃんに用は無いから
今、用があるのはそこのお兄さん達だよ」

「なんで俺達なんだ？」

「だってお兄さん達すつごく面白そうなんだもん、だから遊ぼつ
!」

彼女は、無邪気に笑いながら言う。

あの感覚が無ければ、普通なんだが。

「は？私達はそんなに暇じゃないのよ」

「いや、遊ぼうじゃないか」

で、遊ぶ内容はどうする？」

「えっとね」

『殺し合い』！」

八話：異変解決？（後書き）

次回もこんな日が経たないよう努力していきます。

冒頭と同じく、気長に待って下さい。

九話・狂気の境界線（前書き）

相変わらず短いです

今回は久しぶりの戦闘です、微妙かも知れませんがよろしくお願ひ
します。

戦闘してる割りには会話が多くなってしまいました。

自分の才能の無さを実感してます

九話：狂気の境界線

「「「!?!?」「」

何て言ったんだ？

殺し合い？どうゆうことだよ

「ねえねえ、早くやろうよ『殺し合い』」

「ま、待て殺し合いは良くない、別のにしよう」

「ええ、じゃあなにやるの？」

フランは、残念そうな感じで返事をしてくる。

いや、おかしいでしょ

「それじゃ、弾幕ごっこにしよう」

ルールは簡単、俺と戦って、俺が倒れるかギブアップするか、これで良いかい？」

「ちょ、悠治！お前は何言ってるんだ？」

「それじゃ、追加で私達も加わるで良いかしら？　悠治？」

霊夢が一步前に出て、お祓い棒を構えながら俺に質問してくる。

実際は俺だけで済ましたかったがな　　霊夢は気付いているんだろ
うな。

フランの悍ましい力に

「三対一だけどいいかい？」

「別に良いよ、私と遊んでくれるならね」

「と、言うわけだから二人とも頼むぜ？」

「いつでも良いわよ」

「お、おい悠治！何言ってるんだ！！」

魔理沙は怒鳴りながら、俺に言い寄ってくる。

「お前はなんでそうやって自分のことを考えていないんだ！！」

「い、いや 別に考えていないわけじゃないんだがな」

「じゃあ、なんであんなルールにするんだよ！」

「魔理沙、いい加減にしなさい」

彼に怒鳴っても今更変える気は無いわ」

霊夢は怒鳴る魔理沙を肩を押さえて、魔理沙を落ち着かせる。

「それに、今は他人のことを考えるより自分のことを考えるべき

よ」

「ねえ〜まだ〜」

「あ、ああわりい待たせたな それじゃ、始めますか」

「それじゃ、いつくよ!」

フランが放った弾幕は通常弾幕の筈だが、桁外れの数の弾幕が俺達に襲い掛かってくる。

「尋常じゃねえな どうすれば」

「私に任せなさい!」

霊夢が俺達の前に立ち、手に持った数枚のお札を目の前に投げた。

「そんなもので防げると思っているの?」

「博霊の巫女を舐めないでよね」

空中で止どまっている数枚のお札が小さな結界を張り、それが一つの大きな結界へと変わった。

ズダダダダダダダ

大量の弾幕が襲うが、結界があるお陰で俺達には当たることが無かった。

「へえー、凄いな、じゃあこれならどう? 禁忌『クランベリートラップ』それにその結界邪魔だね」

フランが手を結界に伸ばし握る。
すると突然結界が壊れ、全包围から弾幕が飛んでくる。

「う、嘘!？」

「これじゃ避け切れねえ 鳥符『エアロバースト』!」

俺を含めた三人の周りに弾幕を飛ばし、弾幕の壁を作る。

「これもそう長くは保てない、二人とも飛べ!俺が道を作る!」

「どうやって!？」

「こつやるんだ よ!！」

弾幕を真上に飛ばし、穴を空ける。

「飛んだ方が避けやすいだろ?
後、早くしてくれ そろそろ限界だ」

「分かったわ、魔理沙行くわよ」

「ああ」

霊夢達がある程度飛んだ時には、弾幕の壁は完全に壊れた。
なんとかもってくれたな

「あとは 避けまくるだけか」

前後左右、上空から飛んでくる弾幕を避けるのは、至難の技だな

「後のことは、霊夢達に任せるしか無いな」

くフランsideく

あのお兄さん凄いなあ、弾幕をあんな風に使うなんて。

「やっぱりお兄さんは面白いね」

「私達がいることを忘れないことね」

声が出た方向を見ると、赤白のお姉さんと白黒のお姉さんがいた。

「今度は私達が相手になるわよ」

「さっさと終わらせてやるぜ」

「フランは簡単にはやられないよ」

お姉さん達に向かって弾幕を飛ばけど、簡単に避けられちゃうね。

「最初っから決めてやるぜ！恋符『マスタースパーク』！！」

白黒のお姉さんが小さな箱を構えると、凄く大きなレーザーを放った。

「これは当たったらひとたまりも無いね
でもね」

ズガガガガアアアアアアアアアン

「やったぜ、これで「残念でした」!?!」

急に声が聞こえて、お姉さん達が周りを見回して探している。

「霊夢、魔理沙、フランは周りのコウモリだ!！」

お兄さんがお姉さん達に叫びながら飛んできた。

「流石はお兄さんだね」

周りのコウモリが集まって、人型の形に戻る。

「どうゆうことよ!?!」

「フランは吸血鬼だからね、こんなことするのは簡単なことなんだよ」

「それじゃあ 何回やっても意味無いじゃない」

「やるとすれば、至近距離からやるしかないな」

「近づけたらの話しだけどね

禁忌『レーヴァテイン』」

〈悠治Side〉

フランガスペルカードを唱えると、剣のようなものが現れる。

「まだ壊れないでね」

剣のようなものからレーザーを飛ばしながら、連続で振ってくる。

「サラッと危ないこと言うな」

「そんなことよりどうすんのよ！

これじゃ、近づけないじゃない！」

「私もさっきのマスタースパークが限界だぜ」

霊夢はともかく魔理沙はかなり魔力を消費したみたいだな。

これは早期決着を付けなきゃな 約束が守れねえ

「もうやめなさいフラン!!」

突然レミリア（でいいんだよな）がフランに叫んだ。

「なんなのお姉ちゃん？邪魔しないでくれる？」

「もういい加減にきなさい、おとなしく地下に戻るのよ!!」

「五月蠅いなあ、今、お兄さん達と遊んでるの、お姉ちゃんは黙
ってて」

「フラン、言うことを聞きなさい!!」

なんだこの嫌な感覚 さっきより嫌な感覚がフランからあるな

「もういいや、この五月蠅いお姉ちゃんからやっちゃおう」

フランはレミリアの方を向きレーヴァティンを構えた。

「!!?」

「ま、まずい!!」

翼符『シルバーウィング』!」

「悠治、どうするつもりだ？」

「助ける あのままじゃ吸血鬼でも耐えられるか分からないからな」

陰陽玉をバネにし、加速を付けて飛び出す。

「サヨウナラ」

「くっ」

「フリンSide」

「これで邪魔者は消えたね それじゃ続き始めよう」

お兄さん達が居る方に目を向けると、お兄さんは居なくて、お姉さん達はフランが攻撃した場所を見ていた。

「どうしたの？そっちには何も　！？」

お姉さん達が見ている方を向くと、翼を生やしたお兄さんと抱き抱えられてるお姉ちゃんが居た。

「まさか今日中に二回も同じシチュエーションに会うとは思わなかった　」

「貴方、なんで私を助けたの？」

「別に理由なんてねえよ　」

なんで？　お兄さんはあんなことをしたの？

どうして？　お姉ちゃんを助けたの？

お兄さん達の敵なんでしょ？

わからない　　なんでお姉ちゃんを守ったのかわからない

九話・狂気の境界線（後書き）

今回は微妙なところで終わりましたが、それ以上書くと、見にくくなると思ったので、次回に持ち越しします。

次回で決着つくかどうか

十話・君を守る翼（前書き）

やっと書き終わり、更新が出来ました。

時間かけても誤字が目立つかも知れませんが、その時は遠慮なく言っ
てください。

後半グダグダになっているかもしれません

十話・君を守る翼

（悠治 Side）

「コワス！！ゼンブコワス！！」

あの嫌な感覚が当たっちまったか
一先ず、レミリアを降ろしてから上空に飛び立つ。

「これは 戦うしかないのよね」

「アハハハ！禁忌『フォーオブアカインド』」

スペルカードを唱えると、フランが四人に増え、別々に攻撃してきて避けづらい

「『アハハ、モットタノシモウヨ！！』」

「く そつたれ！！」

翼を強く羽ばたかせて、弾幕を放つ。

「スキダラケダヨ！！」

「なっ！！」

フランに（といっても分身の一人だろう）後ろに回り込まれ、攻撃を仕掛ける。

「なめるなっ！音符『ソニックバード』」

身体を無理矢理捻曲げ、後ろに向かって弾幕を放つ。

フランの弾幕を打ち消しながら進むが、フランは素早く避け、ダメージを与えることが出来ない。

「アハハ、モットモットアソボウヨ、オニウサンハ、フランヲクルシマセナイヨネ！！」

「駄目だ キリがねえ」

一人一人相手をしていると必ず隙が出来ちまう 避けるしかない
な

「夢符『封魔陣』！」

周りの弾幕が結界で消されていき、霊夢と魔理沙が近くまで来た。

「何でもかんでも自分一人で戦かおうとするなよ、私達も居るんだからな」

「単に馬鹿なだけね」

そうだよな、俺は馬鹿だったよ

俺には仲間が居るんだから頼れば良いじゃないか。

「二人ともありがとう 助かるよ」

二人に礼を言ってから、フランに体を向ける。

「(でも私は もうスペルカードは発動できそうにないぜ
できても一回限り

くそ これじゃ悠治達の足手まといじゃないか!!)」

「アハハハハハハハハ!! マダマダコワレナイデネ! 禁忌『カゴ
メカゴメ』」

四人の内、二人のフランは人が一人ギリギリいられるくらいの間隔
で設置型の弾幕を張り、高速の大型弾幕を放ち、設置された弾幕が
大型弾幕が当たった所から崩れるように動きはじめた。

「なによ、めんどくさいわね 夢符『封魔陣』!」

「アハハ!! ソノクライナライミナイヨ!!」

「フランハヨニシルダカラネ!!」

霊夢のスペルカードで弾幕を消すが、また新たな弾幕が置かれる。
フランの分身を早く減らさなきゃな

俺は飛べる限界があるからな なんとかして突破口を開かないと

「オニイサンスキダラケ!! 禁忌『恋の迷路』」

「しまっ !!」

深く考え過ぎた為、二人のフランに後ろに回り込まれた、複雑な迷
路のように弾幕をばら撒かれる。

とてもじゃないが、避けるのは不可能だ。

「ぐはっ」

弾幕の一発一発が重過ぎて もう気が遠くなってきたぞ
これ以上の被弾はまずい ！！

「オニウサンハコレデオシマイナノ？」

「おりゃあー！！」

背後から魔理沙が高速で接近し、至近距離から攻撃を囓ます。

「ソナナコウゲキー！！」

「ナイスよ魔理沙、霊符『夢想封印』！」

魔理沙の攻撃で、フランが一瞬怯んだところに、霊夢の夢想封印が
周りの弾幕を消し去りながら進んでいく。

「グワツ！！」スー

「チツ、本体じゃなかったわね」

夢想封印は直撃したが、フランは霊力の粒なりながら消えた。
どうやらあのフランは分身の方だったようだな。

「アハハハ！！ヒトリヤラレチャッタ！」

「デモザンネンダッタネ」

「ホンモノハコツチニイルンダヨネ!!」

三人のフランは、複雑な動きをとって本物を分らないようにしている。

「完全に遊ばれてるわね」

「それほど余裕なんだろ　こっちはギリギリだったのによ」

正直、ここから勝てる確率なんてほとんど無いと言ってもおかしくない。

あのスペルカードをもろに受けたからな

「フランドール・スカーレット!!」

突然レミリアがフランの名を叫んだ。

「やはり貴女は危険過ぎる、これ以上はこの館が持たないわ！
今すぐ地下に戻りなさい、これは命令よ！」

「馬鹿!!いきなりなに言ってるのよあいつ!!」

「それが妹に対する言葉なのかよ!!」

「アハハハハハ!!イセイダケハイイネアンタ、ソナナカラ
ダデフランニセツキヨウ?」「」

フランはレミリアの言葉を無視するようにスペルカードを唱えた。

「フランニハカンケイナイ！！禁弾『スターボウブレイク』！！」

「フランハヤリタイコトヲヤツテルダケ！禁弾『カタディオプトリック』！！」

「アンタニトメラレルスジアイハナイ！！禁弾『過去を刻む時計』！！」

「また連続でスペルカードか！」

色鮮やかな弾幕。

速度に差がある弾幕。

そして過去をさかのぼるように回転する弾幕。

それらが一斉に飛び交えしてくる。

「さつきから目茶苦茶だぜ！」

「本当にめんどくさいわね」

「くそっ　避け切れねえ　せめて、二人だけでも！」

霊夢達の前に立ち、翼を大きく広げて壁になる。

「悠治、なにやってんのよ！！」

「俺が守れる範囲は、これくらいだからな　弱いなりの悪あがきさ」

こんなのを正面からくらったら死ぬかもしれない　でも、二人を守れるならそれでいい！！

グイッ

「な!？」

突然後ろに引っ張られ、体勢が崩れた。

「この馬鹿悠治」

「魔理沙!!」

魔理沙は俺を引っ張り、八卦炉を構えた。

「約束したよな、だから今度は私が悠治を守る番だぜ!!
残りの魔力をスペルカードに!恋符『マスタースパーク』!!」

八卦炉から放出する、眩い光を放つマスタースパークは、フランの
弾幕を薙ぎ払っていく。

「はあああああ!!」

「グアッ」

三人中、二人のフランにマスタースパークが直撃する。

「はあ はあ やつ たか」

「魔理沙！！」

魔理沙の体は、力無く落ちていくのを、その体を支えながら下りて床に座らせる。

「アハハハハ！！ミンナヤラレチャッタ！マホウツカイノオネエサンハ、コレデオシマイダネ！！」

「ごめん 私、何もできなかった」

「いいや、魔理沙は頑張ったよ 後は俺と霊夢でやつから、今は休んどけ」

魔理沙のおかげで戦うのが楽になったんだ。彼女の為にもフランを止めなきゃな。

翼を羽ばたかせて力強く上空に飛び立つ。

「あいつも無茶するわねえ、あんたに何かあるのかしらね？」

「別に何もねえと思うな」

「アハハ！！ヒトリスクナクナツチャッタケド、コワレナカッタカラ、モットアソボウヨ！！」

まだまだ余裕のフランは、スペルカードを発動させる。

「来るわよ!!」

「コレデミンナコワレチャウカナ!？」

禁弾『そして誰もいなくなるか?』!!!」

スーパーカードを唱えると、フランの姿は消え、弾幕だけが放たれる。

「何処から攻撃しているんだ?

弾幕が放たれるのなら、音符『ソニック』悠治、待ちなさい」

霊夢!？」

「闇雲に攻撃しても意味ないわ、今のあの子には何をやっても効かない」

「避け続けるしかないのか?」

「多分、それくらいね」

スーパーカードをしまうとき、手が何かに触れた。

「これって白紙のスーパーカード? 霊夢に貰ったやつか」

「悠治、それはいざってときに使いなさい」

俺は、軽く頷いてから白紙のスーパーカードをしまい、手に霊力を込めて鳥型の弾を作る。

「それをどうする気? さっき何も効かないって言ったわよね?」

「アハハハ!! ソノオネエサンのイウトオリダヨ、イマノフラン

二八ダンマクナンテアタラナイ!!」

周りからフランの声は聞こえるが、見えるのはフランの弾幕だけだ。

「霊夢、援護してくれないか？少し集中したいんだ」

「それをどうするつもり？やるならさっさとやりなさい！霊符『夢想封印』!!」

霊夢の夢想封印のおかげで俺の周りどころか、全体の弾幕を消していく。

絶対に霊夢とは戦いたくないな

「これは攻撃の為じゃない、こつする為だよ！」

手の平で作った弾を、魔理沙に向けて飛ばし、さらに何発か同じく飛ばす。

「悠治!？な、何を!？」

「魔理沙を守る為さ!」

俺は、意識を集中して鳥（の形をした弾幕）達を魔理沙の周りを浮遊させる。

「え?」

「ごめんな魔理沙　心許ないが今の俺には、これぐらいしか出
来ないから　」

魔理沙の周りを浮遊している鳥達は盾になりように翼を広げ、他の弾幕から防ぐ。

〔魔理沙Side〕

「やっぱり悠治らしいぜ」

私の周りを覆っている鳥達を見た。
自分より、まず相手の事を考えることがあいつらしいぜ。

「まだ私もいけるか？」

体は少し浮くが、これ以上の高さまで行けない。

「モット、モットアソボ！！アハハハハハ！！」

吸血鬼の妹、フランドールとかいったか あいつの声と弾幕だけが私達に降り注いでくる。

「くっ！」

「はあああああ！！」

悠治の攻撃で、弾幕を消していく。

「ふ、防ぎきれねえ」

「でも、これだけなら避けられるそうね」

霊夢と悠治は弾幕を避けれる程だが、今の私には盾があってやっとだ。

「これも何時まで耐えられるか　それまでに少しでも回復しないとな」

「ジャア、ソレヲケセバオシマイダネ」

「!!!?」

私の背後にフランドールが手を私に向け、握った。

キュツ、パーン!

「うわ!?!」

軽い爆発音が鳴り、私の周りの鳥達が消滅した。

「アハハハハハハハハハハハハハハハ!!!」

フランドールは高笑いしながら右手に霊力を込めて、振りかざす。

く悠治Sideく

「魔理沙!!」

何も考えずに、魔理沙に向かって飛んでいった。

「間に合えええ!!」

シューッ

後少しのところでシルバーウィングが切れた。
無理して使った分が此処で来るかよ

ドガッ

「ガハッ
」

フ란の拳が魔理沙の腹部に直撃する。

「魔理沙ああ!!」

陰陽玉を足場にし、白紙のスペルカードを取り出しながら魔理沙に向かってジャンプする。

「俺は絶対に守る、約束を　魔理沙を!!」

白紙のスペルカードを構え、自然とカード名を唱えた。

「守護符『君を守る翼』!!」

「悠治 貴方、その翼は何？」

今までの白銀の翼ではなく、白く一回りでかくなつた翼が生えてい
る。

「魔理沙 ！」

急いで魔理沙の傍まで行き、翼で覆う。

「これなら攻撃は当たらないな」

「ゆう じ ごめ ん」

「いや、魔理沙が謝ることなんてないよ」

フランにやられたところを、触ると「グアッ」と苦しく唸つた。
多分、肋骨をやられたみたいだな。

「大丈夫、今の俺なら何とか出来るかもしれない」

翼が光り、魔理沙を覆う。

やがて、魔理沙を覆っていた光りが翼に戻る。

「う あれ 痛みが消えた」

「なんとか治療は出来たみたいだな」

傷口を触っても痛みは感じていないみたいだし、どうやら治ったようだな。

「ひゃ / / / ちょ、悠治 くすぐったい / / /」

「うん、大丈夫だな」

魔理沙は休んでいる、傷は癒えても霊力はもうないだろ?」

翼を広げ、フランを見る。

「ナンデ!!」

「!?!」

「ナンデオニイサンハソイツヲタスケルノ!!?」

「ナンデオワイヤツヲカバウノ!!?」

「ナンデフランヨムシスルノ!!?」

「あいつ、どうしたの!?!」

「ナンデ」

「なんでフランをひとりにするの」

「フラン」

一瞬だが、フランから狂気が消えた。あれがあの子の本当の気持ち

『壊したい』じゃなくて『寂しい』

「ズット　ズットヒトリダッタ!!」

ヨンヒャクキュウジュウゴネンカンズット、ズット!!」

フランは一枚のスペルカードを発動させる。

「ゼンブコワレロオオオ!!」

QDE『495年の波紋』!!」

「フラン　ごめんさい、私はフランの強さに恐れてたのね
翼の貴方、フランを　お願い　」

「悪いが、あんたの為にはやらない
俺はあの子の為に　フランの為だ!!」

波紋を避けながらフランに近づき、翼で覆う。

「コワイ、ヤメテ！！コナイデー！！」

暴れるフランを強く抱き、抑える。

フランは抵抗するように、波紋をぶつける。

「ぐっ　　苦しいんだろ　　なら俺がすべて受け止めてやる！！」

翼が強く光り、俺とフランを包む。

「ヤダ　コワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイ
わこい　こわいよ　　」

狂気が次第に消え、叫び声が泣き声に変わっていく。

「いやだ　　ひとりにしないで　　こわいよ　　」

「大丈夫、君はひとりじゃない　　家族がいるじゃないか」

「むりだよ　　フランは、みんなを苦しめた悪い子だから　　」

「みんな分かってくれるよ　　俺からも言っただけだから」

不安になっているフランの頭を優しく撫でて、安心させる。

「　　ほんとうに？」

「うん、約束する」

俺の顔を一度見て「うん」と言ったあと、俺の服に顔を埋めた。

「もう覆わなくてもいいか」

覆ってた翼を広げゆっくり下に降りる。

フランはどうやら寝てしまったらしいな。

「レミリア、フランとの約束だ。この子を受け入れてくれるな？」

「ええ　もうフランに寂しい思いさせない　させたくないわ

咲夜居る？」

「はい、お嬢様」

「あ、あの時の」

どこからともなくあのメイドさんが現れた。

「どうしたのその包帯は？」

まあいいわ、フランを私の部屋へ」

「かしくまりました

それでは不知火さん、フランお嬢様を」

咲夜さんという人にフランを渡し、その場から消えた。

「ふうやっと終わりね

それじゃさっさと帰るわよ」

「ああ　　そうだな」

長かった紅霧異変は終わりを告げた。

十話・君を守る翼（後書き）

締めが思いつかなかったので変な終わりかたになってしまいました
ね

次回はできるだけはやく更新しようと努力します

十一話：妖怪入り混じる宴会（前書き）

やはり原作未経験だと違うところが多くなりますね

今回は宴会です。久々のゆっくりとした話しが書けました。

十一話：妖怪入り混じる宴会

「ん？」

目が覚めると、見覚えのある天井があった。

「博霊神社 か」

ここまでの記憶を思い出しながら起き上がる。が、何も思い出せない

「俺何で此処に寝てたんだ？」

「あんたが倒れたからよ」

声のする方向を見ると、そこは少し不機嫌な霊夢がいた。

「あ、霊夢 おはよ」

「おはよじゃないわよ、あんた何日寝てんのよ」

「あれからどれくらい経ったんだ？」

「三日よ。三日間ずっと寝てたのよ まったくこっちに着いた途端、急に倒れるんだから吃驚したわ」

その後、霊夢の愚痴を聞きながら自分の身体を確認した。

「いっつ 全身が痛てえな、」

「それと、後で魔理沙にお礼を言いなさい。その包帯を巻いたの魔理沙よ」

身体中に巻かれた包帯を見た。

微妙に失敗している場所が所々あった。

「あいつ自身もかなり痛手を負っていたみたいね　あんたを治療したらあんたの横で寝てたしね」

「で、その魔理沙は？」

「外にいるわ。動けるようだったら会ってきなさい」

「ああ、そうするよ　と」

重い体を持ち上げ、縁側に通じる障子戸を開けた。

「あ、いたいた。おーい魔理沙ー」

「あ　／／／／起きたのか　じゃ、じゃあ私は用事があるからさよならだぜ　／／／」

「あ、おい　」

声をかけようとしたときには、もう遠くの方まで行ってしまった後だった。

「そんなに急な用だったのか？」

「何やってんのかしらね　夕方から始めるってのに　」

「何が始まんだけ？」

「何ってそりゃあ 宴会よ」

く博霊神社 境内く

西の空が赤らみ始め、次々と妖怪や妖精が集まってくる。

「人間の方が少ないってのがすげえな」

「おらあ！手を休めるな！！終わったら次はこっち！」

今俺は、宴会で出す酒を各々の場所に運んでいる　　が

「これを俺一人でやらされるって　　」

確かにさ、休んだ分手伝うとは言ったが　　霊夢さん一応怪我人な
んですよ俺

「これで、終了！！」

一通りの仕事が終わったので、鳥居に寄りかかり大きく息を吐いた。

「はあ　　」

「お疲れ様。はいこれ、飲み物」

霊夢が飲み物を持ってきた。後ろの方では、お祭り騒ぎ状態だった。

「ありがとう、霊夢

ブハア！！！？こ、これ酒か！？」

「そりゃ宴会っていえばお酒でしょ？」

「いや、おれ未成年だし、そもそも霊夢も未成年じゃないのか？」

「それは外での話しでしょ？幻想郷にはそんなのないし、それに
此処で飲むのが礼儀だと思うけど？」

霊夢に勧められて飲むが、慣れるには時間が掛かりそうだ。

「にしてもこれだけの「おにいいちゃああん！！」「フゴツ！？」

「やっときたわね。あんたらが来ないと始まらないのよ」

「私は吸血鬼よ、日が沈まないと外に出れないわ」

霊夢が誰かと話しをしている。まあ誰だかはわかるがとりあえず

「フ、フラン？ とりあえず前が見えないからどいてくれ」

「わかったー！」

フランが退くと、予想したとおり、紅魔館の住人全員がいた。

「でも良かったのかしら？私は異変の張本人なのよ？」

「まあ宴会は異変解決の締めみたいなものだし、あんたらも来た
ほづが良いと思って呼んだのよ」

「そうね、ちょうどお礼もしたかったし」

そういうと、レミリアは俺の方を見た。

「ありがとう フランを、家族の絆を失わずに済んだわ」

「俺はなんもやってねえよ。それに家族を繋いでいくのはあんたの役目だ」

「お兄ちゃんもフランの家族だよ」

急に肩に浮いていたフランが乗ってきた。まあ肩車状態だな。

「初めて受け入れてくれたのが貴方だったからね、だから家族と
思いたいのよ」

「そっか、そゆうことか　だから家族か」

顔を近づけているフランの頭を撫でると「えへへ」と笑顔で擦り寄ってくる。

「さて、貴女達も宴会を楽しみなさい」

あの後、霊夢の言葉で本格的に宴会が始まった。

俺は一通り回ろうとしたが、フランが乗ってたので紅魔館組を回る事にした。

「妹様、そろそろ降りられたほうが」

「いや、まだここにいる！」

「はははっ、まあ俺は気にしてないし大丈夫だよ」

「そう　あ、自己紹介がまだだったわね

私は十六夜咲夜と言っわよろしく」

「俺は不知火悠治、よろしく咲夜」

軽い握手をしてから酒を飲む　う、もうちつと慣れねえとな

「もしかして悠治ってお酒飲めない？」

「今まで飲んだことないからな　てか外の法律的に無理だし」

「じゃあ、こっちはどう？ワインなんだけど」

「っと、その前に　よっと」

肩に乗っているフランを膝に座らせてから咲夜に勧められたワインを飲む。

やはり俺にはキツイが、果物の甘味のおかげで少しは飲みやすかった。

「うん、美味しい。俺でもぎりぎりいける」

「そ、良かったわ」

ワインを飲みながら他の所を見る。此処は他より静かな方だった。後で回ってみるか。

「さてと、俺はちがうとこ行って挨拶してくるかな。フラン、良
いかい？」

「フランも行くー！」

「レミリア、大丈夫か？」

一応、保護者に聞いとかないとな。

「別に構わないわ。其の代わりフランのこと頼んだわよ」

「了解。フラン行くよ」

「うん」

フランを連れて、他の宴会場所に向かった。

「お嬢様、宜しかったですか？」

「良いのよ。フランにはもっと外のことを知ってほしいし、それ

に彼が付いているから大丈夫よ」

「妹様は悠治を信用しているからかしら？レミィは信用しているの？」

「当たり前よ。私達、家族を繋げ直してくれた人なのだから」

「君達も来てたんだ」

「あ、悠治さん！」

「わはー、お兄ちゃんもいたのかー」

最初に見かけたのは大ちゃんとルーミアがいる小さい者ばかりだった。

「チルノいると思ったんだが、いないのか？」

「実は」

大ちゃんが指差す方では、弾幕ごっこをしているチルノと魔理沙が

いた。

あ、魔理沙用事を終らせて来てたのか。

「あの、悠治さん？後ろの方は？」

「ん？ああ、フランのことが」

「フ、フレンドール・スカーレット　です　」

俺の背中に隠れながら自己紹介をする。

ずっと地下に居たから、今までこつゆうの無かったんだな。

「私は大妖精、皆からは「大ちゃん」って呼ばれてます。よろしくフランちゃん　」

「ルーミアだよーよろしくー」

「よ、よろしく　」

「　大ちゃん達、ちょっとゴメンね　」

一度後ろを見て、フランの顔を見る。

「緊張してるのか？同じくらいの子と話せなかったもんな」

「違うの　大ちゃんたちとお友達になっても、フランのこと恐
がれるかもしれないから　」

また一人になるかもしれない
そう思ってたんだな。

「大丈夫だよフラン、君は優しいから」

「フランがやさしい？」

「うん、フランは誰かを傷つけたくないって思っているでしょ？
なら大丈夫だよ、勇気をだして行ってきな」

「う、うん！」

俺に強く頷いて、フランは大ちゃん達の所へ向かった。

「あ、あのね」

「レミリアさんの妹さんでしょ？スカーレットって言ったから」

「じ、じゃあフランのこと怖い？」

「ぜんぜん恐くないよー。ね、大ちゃん」

「うん むしろ可愛いよ」

背中越しでわからないが顔が赤くなっているな。耳まで赤くなっているし。

「か、可愛いなんて / / /」

「な、大丈夫だったろ？フランを受け入れてくれる人はいくらでもいるんだから、自分から避けちゃ駄目なんだ」

「／＼／　　うん、ありがとうお兄ちゃん」

「じゃ、俺は違う所へ行くかな、フランは此処に居るか？」

「うん　フラン、お友達と遊んでる！」

フランに手を振り、俺は他の場所に移動することにした。
あ、レミリアになんか言われるかな？まあ、大丈夫だろ。

「よっ」

「あら、こっちに来たのね」

寶銭箱の近くで酒を飲んでいる霊夢の隣に座る。

「私といても何にも面白いことないわよ？」

「少し休みたくてな、此処からだと色々見渡せる場所だし」

「ふう　　」と溜め息を一つ吐いて周りを見る。改めて見ると凄
光景だな、殆どが妖怪や妖精で占めてるな　　あの角が生えた子も

なのか。

「あ、面白いかは別だけど、はいこれ新聞」

「なんで新聞？」

「あんたのこと書かれているのよ」

霊夢から受け取った新聞を見ると

驚愕！！突如現れた外来人が異変解決！？

先日の紅霧異変にて博霊霊夢、霧雨魔理沙と共に外来人、不知火悠治は異変を解決しに向かった。

彼の能力は特殊で人間にも拘わらず、翼を生やすという人間離れした力の持ち主のようだ。

紅魔館の主レミリア・スカーレットの妹、フランドール・スカーレットと対決し、彼一人で戦い勝利した。もはや人間ではないと私は感じた。

その後　　以上のことにより今後も私の調査対象になるでしょう。

（記者：射命丸文）

「なんすかこれ？」

「新聞」

「い、いや　そうじゃなくて」

なんだよこの新聞　合っている気もするが　いや全くあってねえよこれ

「てか何だよこの記者は、人間離れしているって酷くねえか！？
ていうかなんで俺の名前知ってたんだよ！」

「いつもそんな感じだしね、あの天狗は

それに天狗の情報網は幻想郷最速だからおかしなことじゃないわ」
幻想郷っていろいろとおかしいよな　今更だけどよ

「　まあ、俺も幻想郷の一員となれたと考えれば、少しはポジ
タイプになれる　かな？」

「前向きについてことね、悠治らしいわ」

「そうかもしれないな　じゃ、またそこら辺回ってみるかな」

霊夢から酒を貰って、別の場所に向かう。
と言っても何もないので、神社の裏手に回った。

「やっぱ此処が落ち着くな」

神社の裏手は木々が開けていて、丁度月が見えている。それに、少し崖になっていて、真下から遠くの方まで月明かりに照らされている。かなり良い景色だ。

「俺、皆を守れたよなでもあの時、このスペルカードが無ければ魔理沙は」

一枚のスペルカードを取り出す。
『君を守る翼』 まだ自分でも分からないことばかりなスペルカードだ。

「もっと強くならなきゃ俺は、誰も守れない」

スペルカードを見ながら最悪の光景を想像したときには、そんな言葉を呟いていた。

「駄目だ！こんなこと考えちゃいけないよな。俺らしく、前向きになつてね」

酒をグイッと飲み、一気に飲み干す。

「プハアっ！ やっぱり酒は苦手だな ハア、流石に酔いが
回ってきたし、戻るか」

立ち上がり、月を見上げる。

「 良い月だ」

俺はまた五月蠅くも賑やかな宴会場に戻ることにした。

余談だが、魔理沙とチルノの弾幕勝負はチルノがボロボロに負けた
ようだ。

十一話：妖怪入り混じる宴会（後書き）

書くのを忘れてましたが美鈴は、荷物係でしたのでぶっ倒れています。

次回は日常風景を書こうかと思っています。

早ければ2週間程で遅ければ1ヶ月ですね
はい すいません、自分の力不足ですね

十二話：吸血鬼に招待されました。（前書き）

書いてたらタイトルと内容が少し違ってしまいました。

タイトル変えた方が良かったですかね？

十二話：吸血鬼に招待されました。

宴会が終わってから約一週間が経った頃だろう、レミアアから招待状が送られてきた。

「そっぴや宴会の時にいづれ招待するって言ってたな」

俺は翌日でも良いと言ったが、俺の傷が癒える頃になると言われた。

「で、どうするの？」

「もう体の方は動かせるし、行ってくるかな？せっかく招待されただし」

「そ、なら二、三日空けるのね。それじゃそのあとにするの？」

「ああそつだな。よし、まだ昼間だけど行ってくるか、他にやることあるし」

いつものように陰陽玉を取り出し、靈力を込める。

「それじゃ行ってくる。また仕事出来なくて悪いな」

「後で、みっちり仕事させるから大丈夫よ。いつもの倍よ、分かった？」

「う、覚悟しときます」

陰陽玉に乗り、真上に飛び立つ。

とりあえず目印として湖に向かうか。

「どづゆづことよ」

湖から紅魔館の道を歩いてきたら、まさか俺の周りに鳥が飛び回ったり、頭に乗ったりしている。それに鳥の妖怪もいるし

「改めて俺の能力って変だよな みんな頼むからどいてくれ！」

『はい』

「大変ですね、不知火さんも」

体中にいた鳥達を退けていたら、いつの間にか紅魔館の前まで来ていたようだ。

「お嬢様から聞いてます。不知火さんどうぞお入り下さい」

「堅苦しいから不知火はやめてくれ、悠治で良いよ」

「そうですね、それなら私のことはさん付けじゃなくて良いですよ。あの、悠治さん時間ありますよね？」

「ん？そうだな、結構あるな」

俺がそう言つと、美鈴が嬉しそうに構えた。

「なら一つ手合わせをお願いできますか？」

「別に良いけど。俺、接近戦とか無理なんだけど」

「大丈夫ですよ、ちょっと弾幕勝負に格闘を合わせた感じですよ。」

悠治さんはスペルカードを使つても構いません」

美鈴がやる気満々なので、俺も渋々構える。

「それでは、いきますよー ハッ！」

「うわっ！！ とと」

美鈴の正拳突きぎりぎり回避す。

「私の攻撃を避わしますか」

「弾幕勝負じゃねえだろこれ！殆ど格闘じゃねえか！（左から来

るか！）」

「じゃ、訂正します。私は格闘技を中心にします　っね！！」

美鈴の蹴りを受け流し、そのまま掴んで投げ飛ばす。

「私の攻撃を読むなんて、やりますね」

「ぎりぎりだな　音符『ソニックバード』！」

美鈴の周りに向けて弾幕を飛ばす。

「動きを封じる為ですか？でも、正面がお留守ですよ！」

「一つは当たってるが二つ目はハズレだな、はあっ！！」

「！？」

弾幕の軌道を変えて、美鈴に向ける。

案の定、美鈴は弾幕を避わず為に真正面から向かってきた。そこに一発、弾を放った。

「おっとこれは危ないですね」

俺の放った弾は、美鈴の脇を逸れて行った。

「弾いた！？いや、軌道を変えたのか」

「正解です。私の能力『気操る程度の能力』で、悠治さんの弾幕の軌道を変えさせて頂きました。弾幕は気の塊ですからね」

そうすると美鈴ってかなり強くないか？
弾幕効かないじゃん

「でも私って接近戦とか格闘技が得意ですから本当の弾幕勝負は
苦手なんですよね

ルールのにも不利ですから私」

「アハハ」と頭を掻きながら苦笑いをする。

「では、悠治さんもう少しよろしいですか？」

「応、いつでも良いぞ」

「それでは、いきますよー『グサツ』痛い!？」

いきなり美鈴の頭にナイフが刺さった。
痛いで済むのか？

「お嬢様の客人に何をやっているのよ」

「ですけど、いきなり後頭部にナイフを刺さないでください!これ
すっごく痛いんですよ!」

「貴女は別に良いのよ、でも客人に怪我をさせる訳にはいかない
のよ」

「あ、あの一」

このままにしていたら拉致が空かないと思って声をかける。かなり

気まずいんだこと

「あ、ごめんなさいうちの門番が迷惑かけてしまって」

「悠治さんから何か言ってく下さいよ」

「まあ、俺が時間あるからやるって言って言ったんだし美鈴だけを責めなくても良いんじゃないかな？」

涙目になっている美鈴が「そうです！」と言わんばかりに、強く頷いている。

「はあ、貴方がそう言うなら今回は許してあげましょうでは、不知火悠治さんどうぞ」

「それじゃ、機会がありましたらまた一つお願いしますねー」

「ああ」

そのまま咲夜の案内で館に向かった。

く紅魔館 玄関口く

「お嬢様は起きていないけど、悠治はどうするの？まだ時間があるけど」

「そうだな 図書館に行ってみるかな？」

「そう、道は分かっているわね。」

時間になったら呼びに行くわ、それじゃ」

目の前から咲夜が消えた途端に、外から悲鳴が聞こえた。聞かなかったことにして図書館に足を進めた。

（紅魔館地下　グワル魔法図書館）

「おお、迷わずに来れた」

正直、此処まで来るのに半分以上が勘で動いてたからな　地下に
行くのは覚えていて良かった。

目の前の扉を開けて中に入る。
異変の時は本が大量に散乱してたが、今は綺麗に並べてある。

「改めて見ると、凄い量の本だな」

「此処にある本は、魔導書などの魔力を持った本が多多あるわ」
奥の方から本を持った少女が歩いてきた。

「いらっしやい、悠治」

「邪魔してるぜ、パチュリー」

「立ち話も何だし向こうでお茶しましょ？レミィはまだ起きない
し」

「ああ、そうするよ」

パチュリーの後を追って図書館の広間に出る。

「で、何か用があつて来たんでしょ？」

「ん？まあ、そうだな　どうやったら俺は元の世界、外の世界に戻るのかなって」

「ふむ　それは難しいわね、いきなりどうして？貴方、宴会のときはそういう感じじゃなかったけど？」

パチュリーが俺の質問に不思議がる。まあ、無理もないな。

「あのあと、ふと思つたんだよな　俺は幻想郷に来た、でも外の世界では俺の家族がいたから　何も言わずに来ちまったからな」

「悠治の本当の家族？でも幻想郷つて忘れ去られたものが来る場所でしょ」

「イマイチ覚えていないんだけど、金髪の女性に変な空間に落ちることされて幻想郷に来たんだよな　変な話しだろ」

苦笑いをしながら俺が来た状況を話す。

正直、痩せ我慢してるよな俺

「やめてくださいよー！！」

「ー！？どうしたんだ！」

「はあ、またか」

呆れた顔でパチュリーが言っていると、でかい袋を担いだ魔理沙が現れた。

「では、おさらばだぜ！

おおパチュリー、また ってゆ、悠治！？／／／／ななな何でいるんだ／／／／」

「そういう魔理沙はなんているんだ？あと、そのでかい袋は？」

「あ いや／／／えっと これは その／／／」

魔理沙は何故か焦り、口籠もる。

「本を 　／／／そう、私は本を借りに来たんだぜ／／／」

「嘘です！！盗んで行くんじゃないですか！！」

「ひ、人聞き悪いこと言うな！私は借りて行くだけだ。私が死ぬまでな」

「人はそれを盗むと言うのよ？」

パチュリーと小悪魔に言われて、軽く後退りをする。

あ、逃げる気だな。

「逃がしません！！」

逃げようとする魔理沙を、小悪魔が必死に取り押さえる。
押さえられてる魔理沙にパチュリーがスペルカードを持ちながら近づく。

「ナイスよこあ、貴女はいつもいつも さあ、魔理沙覚悟は良いかしら？」

「い、いや待てて！！この本はどうすんだぜ！！」

「大丈夫よ 此処にある本は耐魔性の結界が施されてるから、魔理沙のマスタースパークでも焼け焦げないわ
だから安心してくだいなさい」

「や、やめ！！」「日符『ロイヤルフルア』！！」「やめてくれええええええええ！！」

「いい？借りていくの良いけど、今後は期限を守ること。分かつ

た？」

「はい」

あのと、反省したのか袋に入っていた本は元に戻した。

「こあ〜」

「小悪魔、大丈夫か？」

もちろんのこと押さえていた小悪魔もパチュリー様の攻撃をくらった。

「立てるか？」

「ありがとうございます 私はパチュリー様の力になれたのなら、これくらいのことどうってこと無いです!!」

「まあ、うん 本人が大丈夫って言うてるなら大丈夫か」

でも、足元がふらついてるけど本当に大丈夫なのか？
あ、説教が終わったみたいだな。

「それじゃ、今度帰しにくるぜ じ、じゃあな悠治ノノ」

「ん？ああ、またな」

「はあ　頭がクラクラするわ　」

「大丈夫ですか？パチユリー様？」

パチユリーは、頭を押さえながら本棚に寄り掛かる。

「いつもの貧血よ　」

パチユリーの顔が真っ青になり、後ろに倒れそうになる。

「大丈夫ですか？パチユリー様」

「「咲夜さくら！」」

「咲夜　ありがとう　椅子に座らせてくれるかしら？」

咲夜がパチユリーを椅子に座らせると、俺の方を向いて一礼した。

「お嬢様がお目覚めになりましたので、部屋に案内するわ。着いてきて」

「あ、もうそんな時間か」

窓の方を見ると、空が赤くなっていた。

まだ早いんじゃないかと思ったが、気にせず図書館を後にした。

くレミリアsideく

「ふあ〜」

全く、フランったら悠治が来るから早く起きるって言ってもなんで私まで早起きすることになるのよ 私はまだ眠いのに

「もう、お兄ちゃん来ちゃうよ〜。シャキツとして！主としての威厳がないよ！〜」

「うっ 妹にそんなこと言われるとは そうね、しっかりとした態度を取らなくちゃね」

服などの乱れた場所を整え、凜とした状態にする。

「でも また欠伸が 「お嬢様、お連れしました」ハウッ!？」

「悠治Side」

「」

俺達が入ると、レミリアが転がっていた。

「だ、大丈夫!?!お姉ちゃん?」

「うー 咲夜！いきなり入って来ないでよ！！」

「申し訳ありません」

咲夜が鼻血を出していることを俺は言うべきなのか

「ゴホン よく来たわね」

「いや、今更カリスマを出しても意味無いぞ」

俺がツツコムと「う、うるさい！！」と言われた。
あ、レミリアの扱い方が分かってきたぞ。

「お兄ちゃん、いらっしやーい」

「やあ、フラン」

「私をむしするなー！！」

フランを撫でてる俺に怒鳴ってくるが、無視して話しをする。

「いい子にしてたか？」

「うん フラン、いい子にしてたよ」

「うー」

「（ああ 涙目のお嬢様、可愛過ぎるわ）」

吸血鬼を撫でる人間と撫でられる吸血鬼。涙目の主人を見ながら、真顔で鼻血を出す従者。

これを第三者から見たらどれだけシユールだろうか (by作者)

「ん？なんか聞こえた気がする まあどうでもいいか」

「ねえお姉ちゃん、お兄ちゃんと遊んでるね」

「もうすきにしないで！！」

もう威厳も何も無いね

「フランの面倒は見るから、じゃ」

うーうー言ってるレミリアを軽くあしらって、引っ張るフランと部屋を出て行った。

く紅魔館 フランの部屋く

「へえ、此処がフランの部屋か」

「そうだよ、お姉ちゃんが用意してくれたの」

部屋の装飾は、実に女の子らしい色合いだ。
そこに不自然な物があった。

「なんでテレビとゲーム機が？」

「外の遊び道具なんだって。なんでも屋さんのとこから貰ってきたんだって」

「へ、へえ」

なんでセ サターンがあるんだ？それ以前に、電気とかどうすんのよ 幻想郷は電気なんて無いだろ。

「これってつくの？」

「うん、実際はでんきってやつで動くみたいなんだけど、霊力とかでも動かせるようにしてくれたの」

フランが電源をつけると、ちゃんとセサターンが起動した。なんか凄いな　いろいろと

画面を見ると古臭くて懐かしいゲームタイトルが表示された。

「これってス　ツチャーか？懐かしいな」

「お兄ちゃんこれ知っているの？フラン、これ難しくてまだ途中なの。お兄ちゃん手伝ってくれる？」

「俺も外の世界で昔のゲーム引っ張り出してやってた程度だからな、よく覚えてないけど良いよ」

その後、ス　ツチャーに夢中になってしまい、朝方までやり続けてクリアした。

もちろんのことだが咲夜にフラン共々こっ酷く叱られたよ

でも、途中までしか記憶が無いんだよな　気づいたらベッドで寝てたし、隣にフランが寝てたし　うん、後で咲夜に謝らなきゃな。

十二話：吸血鬼に招待されました。（後書き）

ナツチャー（コミ株式会社）

1988年に発売されたパソコン用ゲーム。

その後、ガサターン/プ イステーションに移植された作品。

因みに、メイン制作者はGSで有名な某監督でもあります。

簡潔過ぎますが、他は書かなくても良いと思いましたが、ただの情報不足ですね

十三話：友達を守る力を（前書き）

自分でも何故このような流れになってしまったのか分からない
だが、私は反省はしていない。

今回は短めです。他は後書きにて

十三話：友達を守る力を

「うし、こんなもんかな？」

「そろそろ行くのね」

紅魔館で一日泊めてもらい、戻ってきてから俺は荷物を整えた。

「場所は人里を過ぎた辺りだから」

「何でもかんでも頼んじまって悪いな」

「あんたが強くなるためでしょ？それに、今後異変の時に戦力になってもらわなきゃね」

「そうだな。そのために修行だからな」

荷物を担いで庭に出る。

「さつてと、行きますか！翼符『シルバーウィング』！」

「いつもの陰陽玉は使わないのね？」

「それなりに遠いからな、速度は魔理沙並か少し上ぐらいだし。その分消費は激しいけどな」

背中に生やした翼を一回羽ばたかせて、飛び立つ準備をする。

「それじゃ霊夢、またな」

強く飛ばたいで上空に飛び立つ。

「人間の里 上空」

「えっと 人里を超えた先だから」

人里の上空（正確には少し手前）で方角を確認する。

「妖怪の山は警備が厳重だから無いとして、魔法の森の方だな」

魔法の森を向いて再び進みはじめた。

一方人里では

「まいどありい、しっかし凄い量の食料だね」

「これでもまだ少ない方ですよ。一日持ち持ちません」

「そうかい、そりゃあ大変だなあっはっはっは！」

「それでは　ん？なんだろあの鳥みたいなの、人？　あ、そんなこと言ってる場合じゃない、幽々子様が待っているんだった。急がなきゃ」

く魔法の森　入り口く

「さて、ここからどうすっか　正確な場所まで聞いてなかった

し」

スペルを切って考える。

「もう考えるより行動するしかないな」

荷物を担ぎ直し、魔法の森に入ろうとしたとき

「おーい、悠治君！」

俺を呼ぶ声が聞こえた。声のする方を向くと、一人の男の人がいた。

「ん？あ、霖之助さん！」

森近霖之助、人間と妖怪のハーフで、魔法の森の入り口に佇む店『香霖堂』の店主。幻想郷に流れ着く外の世界の道具などを売買している店だ。

この人の『未知のアイテムの名称と用途がわかる程度の能力』はかなり凄い能力なのだが、どう使うかまでは分からないらしい。でも、大体が外の物だから俺にはあんまり関係がないけどな。

「君がこんなところにいるなんて珍しいね」

「ちよつととある人に会いに行くんすよ」

「それって魔理沙とか？」

「なんで魔理沙が出てくるんだ？俺は修業の為に行くんすよ」

霖之助さんが少し考えたあと、「ちよつと待ってて」と言って店に

戻って行った。

「これを持っていくといい」

霖之助さんが俺に見せたのは、一本の刀と数枚のスペルカードだ。

「この刀とスペルカードは？」

「この刀は僕の造ったマジックアイテムなんだ。一見何の変哲もない刀だけど、霊力を込めることが出来て、形状も少しだけ変えることも可能だよ。後、そのスペルカードは僕が使わなくなった奴さ。遠慮せずに持って行ってくれ」

「ありがとうございます！」

その刀、俺の持っている陰陽玉みたいだな」

そういつて陰陽玉を取り出して、霖之助さんに見せた。

「お、これは 間違いない、以前、霊夢にあげた陰陽玉だ」

「もしかして、それ造ったの霖之助さんなんすか？」

「うん、昔の霊夢は飛べなかったからね。でも、すぐ飛べるようになったから使われなかったみたいだけど」

霖之助さんは少し苦笑いをして、刀とスペルカードを渡した。

「それじゃ、此处で道草させるのも君の為にならないね」

「そうっすね、それじゃまた」

霖之助さんから貰った刀とスペルカードを仕舞って、魔法の森へ足を進めた。

「やはり少し似ているよ君たちは 自分の弱さを努力でカバーしているところとかね」

そう呟いて、霖之助は店の中に戻っていった。

魔法の森 南西

「おい、こっちで良いのか？」

『はい、こっちの方で合っている筈です』

一羽の妖鳥が木々に飛び移りながら案内をしていく。
何故、案内をしてもらっているかというところ

（約一時間前）

森に入って数分。

「うん 迷ったな そりゃ場所がわからなきゃ迷うわな」

このままでは拉致が空かないと思ったので、能力で辺りの鳥たちを呼び（主に妖鳥）、俺の探している人物の特徴を話した。
此処で暮らしている分土地勘はあるよな。

「てな感じの人物なんだけど知っているか？」

『うん そんなひと居たかな？』

『私たちもそんな人見た覚えはないなあ』

「そうか、この森に居る筈なんだけどな」

「どうやら此処の住人でも知らないようだ。諦めて足を進めようとしたとき

『あ、僕その人知ってる!!』

「本当か!?!」

『うん!ついて来て!』

「で、それからかなり経ったんだが 本当に居たのか?」

『本当だよ!僕、この目で見たもん!』

この妖鳥(因みに雌な)なんで一人称が僕なんだろうか 　　とか信じて良いものなのか 　　そんなことを心の中で愚痴りながら付いていくと、小川のある開けた場所に出た。

『ほら、あそこに居るよ』

妖鳥が見ている方向を見ると、座禅を組んでいる一人の老人が居た(後ろ姿でよく分からないが、白髪が生えているし老人だろう)。

『それじゃ、僕はこの辺で。切られないようにね』

「切られないようにって何！」

俺の言葉を聞く前に妖鳥は飛んで行ってしまった。

さっきの妖鳥の言葉が気になりつつも、俺は座禅を組んでいる老人に近付いた。

「あ、あの」

反応が全くない

「俺、博霊神社から来た不知火悠治って言うんですけど、霊夢に言われて貴方を探しに来たんですけど」

根気強く話し掛けたが、それでも反応がない　人違いだと思い、そこを立ち去ろうとしたとき

ヒュンッ

「!？」

突然、老人が刀を振ってきた。それを紙一重で避わす。

「ほう、儂の一撃を避わしおったか」

「いきなり何すんだ！」

構えて攻撃体制に入る。

「そんなに警戒するでない。儂はお主を試したかったのだ」

「た、試す？」

目の前の爺さんは刀を仕舞い、俺に質問してきた。

「何故、此処に来た？」

「はあ？」

「何故、儂のところに来たと言っておるのだ」

「それは、俺が強くなりたいたいから 仲間を守る強さが欲しいから、修業に来たんだ」

爺さんは俺を不思議そうに見てきた。

「自分の為、ではないのか？」

「自分の為でもある。でも仲間を 友達を守る強さのほつが必要だ」

「はっはっはっは！！」

爺さんはいきなり笑いだした。

「いや、すまない やはりお主は霊夢殿が言っていた通りの人物

「じゃの。良いだろう、儂が鍛えてやるっ」

「本当か！？いや本当ですか！？」

「うむ。儂に二言はないぞ？」

「宜しく願います…！」

俺はこの人のもとで修業することになった。

十三話：友達を守る力を（後書き）

はい。何故か修業することになりました。

それと霖之助が自分のスペルカードをあげたのかと言うと、霖之助は弾幕勝負をしない。スペルカードを使っていない。ということはスペルカードは白紙。

という自分の勝手な考えです はい

誤字などありましたら感想にてお願いします。

十四話：恋する魔法使い（前書き）

タイトルを見れば大体お察し出来るでしょう。

今回はかなり短いです。主人公も一応出てきます。

では、彼女いない歴〃年齢の作者が書いた恋愛話です。

今更だけどキャラ崩壊してるな

追記：誤字がありましたので、再投稿です。ご迷惑を掛けました。

十四話：恋する魔法使い

（霊夢Side）

悠治が修業に出て数日が経った。私はいつも通り境内の掃除を済ませて、縁側で寛いでいる。

「相変わらず平和ねえ」

お茶を飲んでいると一人の少女が現れた。

「よ、よう霊夢 ゆ、悠治はいるのか？」

「あら魔理沙、悠治はいないわよ？」

「そうか なら良いんだ」

魔理沙は少し残念そうな顔をしながら私の横に座った。

「」

「」

何よこの空気 せつかくの穏やかな気分が台なしじゃない
私に心の中で愚痴っていると、魔理沙が話し出した。

「な、なあ霊夢 悠治ってどんな奴なんだぜ？」

「はあ？いきなり何言ってるのよ。」

ん〜まあ、結構気が利くし、仕事もテキパキと出来る奴ね。魔理沙もよく知ってるでしょ？」

「う、うん」

また魔理沙が黙り込み、沈黙が続く。

「」

「ああ！もう！！言いたいことがあるなら言ってよね！黙ってちゃ分からないでしょ！！」

「そ、それが分かったら苦労しないんだぜ！！」

魔理沙は顔を赤くしながらそう言った。
分からないって

「何がよ？」

「え？」

「何が分からないのよ？」

私がそう言うと、少し俯いてからまた話し出した。

「じ、自分の気持ちにだぜ」

「は？」

「今の私自身の気持ちが分からないんだぜ」

正直、魔理沙が言っていることがよく分からなかった。でも、親友として相談に乗ることにした。（なんか私らしくないわね）

「魔理沙は誰かに対する気持ちが分からないの？」

「うん　私は、悠治を見るとドキドキする　言葉が詰まる
それが何故だか分からないんだ」

そうゆうことが。というか殆ど答えを言ってるものじゃない。

「恋は盲目　とはよく言ったものね」

「え　？」

「魔理沙、悠治のこと好きなんですよ？」

私がそう言つと、魔理沙は目を丸くして驚いた。

「わ、私が　ゆゆ悠治のこと好き！？／／／」

「動揺しすぎよ、あんたの言ったことを聞けば誰でも分かるわよ」

「それって　どうゆうことだぜ　？」

「どうゆうつて、いい加減分かりなさい。悠治に恋愛感情を抱いているんですよ？」

恋愛感情って言葉が引き金になったのか、魔理沙の顔が真っ赤になり頭から煙が出た。

しばらく真っ赤になっていた魔理沙が、落ち着き、深呼吸をしてから話した。

「そっか 私、ずっと悠治のことが好きだったんだな」

「自分のスペルカードに恋って付けてるくせに恋心に気付かないのって可らしいわよ」クスッ

「だ、だってこんな気持ちになったの初めてだから、仕方ないんだぜー!!」

私が笑うと、魔理沙が慌てて言い返す。
こっという魔理沙も新鮮で面白いわね。

「そっいや、悠治って何処に行ったんだ？」

「ああ、あいつは今修業に行ってるわ」

「修業!? なんでいきなり修業だなんて、そんなこと一言も聞いてないぜ？」

「そりゃ、あいつ自身が他の人には言うなって言ったからよ」

私はそう言うてからお茶を飲む。隣にいる魔理沙は訳が分からないって顔をしている。

「何処に向かったんだ？」

「行ってどうするの? 行ったとしても邪魔になるだけよ? あいつのことを好きなら信じなさい」

「ああ、分かった。なら悠治の代わりに出来ることがあるな
ら」

「なら、悠治がない間此処で働いてくれる？」

私の言葉を聞くなりそそくさと筭に乗り、飛び立とうとする。

「何処に行こうとしてるのかしら？」

「い、いやあ そろそろ帰ろうかと ちょ、その笑顔怖い!!」

「悠治の代わりはどうするの？」

「だって、元は霊夢一人でやってたことだから や、やめ
悠治いいいい!! 助けてくれええええ!!」

叫んでいる魔理沙を無視し、引つ張って居間に入って行った。

「イックシッ!？」

「風邪か? 体調管理せんといかんぞ？」

「いや、大丈夫です。 誰か噂でもしてんのか? まあいつか」

〈魔理沙 Side〉

「意外と似合うじゃない」

「ううう　　恥ずかしいぜ　　／＼／」

今、私はいつもの服は着ていない。

「いつも気になっていたんだが、なんで脇が空いているんだぜ？」

「文句ある？」

「い、いえ！！何も！！」

霊夢が着ているのと同じ巫女服を着ている。

「神社で働くんなら、ちゃんとした格好をしなきゃね」

「こんな格好 誰かに見られたら「あやややや!?! 珍しい場面に出会えましたね」!?! てめえ!?! 文屋!?!」

障子あけて、天狗の射命丸文しゃめいまるあやがカメラ片手に飛び込んできた。

「おお、魔理沙さんの巫女服ですか。これは良いネタになりますね!」パシャパシャ

「勝手に撮るな!?!」

こんなの悠治なんかに見られたら恥ずかしくて顔を合わせにくくなる!?!

「全く 騒がしいわね」

「霊夢も呆れてないで手伝ってくれ!?!」

「魔理沙さん? 何赤くなっているんですか? あの外来人に見せたくないんですか?」

「な//!!?」

「その顔もらいました!?!」パシャッ

この天狗うう ぶつとばす!?!

「ぬがあああああ!!」

「ほらほら 動きが単調になってきましたよ？」

「はあ 子供ね」

霊夢は呆れながら弄られている魔理沙を眺めていた。

十四話：恋する魔法使い（後書き）

いやあなんで後半がこうなったのか自分には分かりません。

一つ分かることは、書くことが無かったからこうなった。

もう　　なんかすいません

誤字などありましたら感想にて。

番外編：〔第一回〕主人公設定（前書き）

この番外編を見るに当たって三つの条件がある

一つ目は、メタ発言

二つ目は、キャラ崩壊

そして三つ目は、駄文

この三つが駄目な奴は、ブラウザバックをしたほうが良いだろう

と、言う訳で番外編を書いてみました。

舞台裏風ですから、気にしたら負けですよねえ

それでは、どうぞ！！

番外編：〔第一回〕主人公設定

〔博霊神社 居間〕

さあ始まりました。東方飛翔録、番外編が此処、博霊神社特設会場（居間）からお送りします。

司会は作者の星屑 が、そして解説の

「ちよ、なんだよ放せて！」 羽交い締めされながら連行中

東方飛翔録の主人公『不知火悠治』だ！

というわけで番外編が始まりましたが、なんで羽交い締めで来たのですか？

「俺が知るか！いきなり罪の袋を被った黒服の奴らに捕まったんだ！」

ああ、うちのスタッフですね。顔はNGと言われたんで仮面をまあ、どうでもいいや。

「どうでも良くないだろ てか何で博霊神社なんだ？霊夢が黙っていい」あ、悠治もいたのね 待ってて、今お茶入淹れるから」
何をした」

別に何も。ただ、賽銭箱にお金を少々
二千円くらいでしたかね。

「」

まあ、そのおかげで今日一日は貸してくれるそうなので有り難いです。（二食付）

とりあえず、本題に移りましょう。

今回何故このような形で進めるのかと言うと、ただ説明するだけではつまらないかなと思いましたが。

「こんなことするなら本編進めろよ」

君のことを分かった方が読者の方に伝わり易いでしょう。では名前と能力を。

名前：不知火悠治

能力：『鳥を操る程度の能力』

説明）主に鳥と話すことが出来、（無意識で）懐かせることができる。

鳥の意味とは関係なく操ることは出来ない。周りに集まらせたり、簡単なことしか出来ない。

鳥の意思とは関係なく操ることは出来ない。周りに集まらせたり、簡単なことしか出来ない。

但し、集中すれば完全に操ることが出来る。

まあ、こんなところでしょう。

「完全に操るってのはやったことないから、どうなるか分からないな」

いずれ行つときが来るでしょうね。

「はい お待たせ」

あ、どうもありがとうございます。

「なんか 霊夢の扱いが上手い気がするな このお茶って、霊夢がたまに（主に霊夢がご機嫌のとき）しか出さない高級茶葉じゃねえか！？ どれだけ機嫌が良いんだ」

まあまあ、気にしない気にしない
続いては、スペルカードの解説に行きましょう。

一枚目：鳥符『エアロバースト』

「俺が一番最初に使ったスペルカードだな」

そうですね。今持っているスペルカードの中でも一番使い勝手が良い奴ですね。

「自動ホーミング機能を持つているけど、俺自身が動かすことも出来るからな。でも一発一発の威力は当てにならないけど」

弾幕勝負は当たったら負けだからね。威力はあまり関係ないよ。でも弾幕はかなり濃いよね？

「まあな。あの大量の弾幕を操るのは霊力の消費を早めるんだよな。もう慣れて消費も抑えられるけど」

異変のときよくやってたね。
それじゃ、二枚目にいきましようか。

二枚目：音符「ソニックバード」

「二枚目のソニックバードは、言葉の通り高速で弾幕を飛ばすスペルカードだな」

このスペルカードも操ることが出来るんだよね。

「でもエアロバーストと違って自由自在って訳にはいかないな。軌道を変えるのがやっとなってところだ」

威力も高いし、普通の弾幕ぐらいなら消し飛ばせるからね。

「そのかわり、弾幕は薄めだな。薄めといっても単発じゃないけど」

いや　それ言わなくてもいいんじゃない？

「何となくだよ何となく」

で、では、三枚目ですね。

三枚目：翼符『シルバーウイング』

はい！この作品で一番重要なスペルカードですね！！

「最初は只単に飛べるだけっていう設定だったんだよね」

でも、それじゃ詰まらないから弾幕も放てるように変えたんだよね。実は紅霧異変の咲夜さんの回まで弾幕を放てるようにしようなんて考えていなかったし。

「それで第九話のとき、フランとの戦いでふと思い付いたんだよね」

あ、解説がまだでしたね。

本編でも少し書きましたが、このスペルカードは背中に翼を生やし、一定時間飛ぶことが出来ます。

「俺自体は飛ぶことが出来ないからな、このスペルカードがあるお陰で他の人達とも対等でいられる」

最大で今は、十分、又はスペルブレイクするまでですね。

「ここでオリジナル設定だ。このスペルカード、翼符『シルバーウィング』にいたっては、スペルブレイクする場合、弾幕を放てなくだけにする。そうしないと俺はかなり不利なるからな」

まあ、それは見てくださっている方がどう思うかで変わるね。

「それじゃ最後のカードに移るか」

四枚目：守護符『君を守る翼』

「このスペルカードか」

多分、大体の人がこのスペルカードの能力が分からないだろうからちゃんと説明しなきゃいけませんね。

このスペルカードは、翼で周りを囲めば外部からの攻撃は効きませ

ん。

そして、内部は治癒能力と鎮静能力を持っています。

「だから魔理沙のときは傷の治癒と鎮静、フランは狂気を鎮静させたって訳だ」

かなり高い能力を持ちつつシルバーウィングみたいに飛ぶことも出来るからね。

「但し、発動条件が俺が『守りたい』や『助けたい』っていう感情が高くならなないと発動が出来ないんだよな　前にやってみたけど何も起きなかったし」

簡単に言えば回復スペルですね。

自分でもなんでこんな難しいのを作ったのかわかりませんが、後悔なぞしてないがな!!

「さてこんなもんかな？」

そうですね。何て言うか、こんなふうに番外編をやるのって難しいですね。

「普段はストーリーを進めていくだけだからな。お前みたいな駄作者がこんなことやるとは思っていなかったぜ」

気分転換に違った感じで設定解説をやりたかったんだよ!!

「むきになるなって。さて、第一回番外編はこれにて終了。で、

第二回があるのか？」

私の台詞を取られた上に、まだ決まっていなことを言うとは

「知らん。俺にはどうでもいい、さっさと終わらせようぜ」

酷すぎでしょ！！

「皆さん 第二回があるか分からないけど、その時までご機嫌

よう」

ぬわー！！絞められた！！

番外編：〔第一回〕主人公設定（後書き）

第一回があるなら第二回がある

そんなの分らないじゃないか！！

さて、次回はなんも考えてないのでまた時期が空くかと

気長に待っててください。

それでは、誤字や脱字がありましたら感想にてお願いします！！

やっと絞められた (; ;)

十五話・桜と雪（前書き）

さあて タイトル見ればお分かりかと思いますが、やっと妖々夢
です。

正直、手探りで書いていたのでおかしな部分が多々あるかと

では、どうぞー！

十五話：桜と雪

俺が修業に出て、もう春が来ている。

「はあー!」

「ぬー!?!」

俺はいつも通り、師匠に鍛えてもらっていた。

「もう少しで切られるところだったわい」

「余裕で避けといて何言ってるんすか　俺の自信を無くす気なんですか?」

今は、剣の修業中だ。俺は霖之助さんから貰った刀を使い、師匠は刀は持っているが、使わず避けるだけだ。

「だが、今のは一瞬刀に手を掛けてしまったぞ?つまり、悠治の振りが良くなったと言っことだぞ?」

「でもなー　う　イックシッ!」

にしてもまだ雪が積もるか　」

周りの木々を見ると、もう五月に入るといふのに白い葉を(つまり雪だな)乗せていた。　俺は何言ってるんだかな

「異変　か」

不意にそんな言葉を発していた。

「場所は分かるのか？」

「さあ〜ん？」

目の前に雪景色に不釣り合いなものが飛び込んできた。

「これ、桜の花びら？」

飛んできた方向を見る。

白い雪にぼつぼつと桜の花びらが混じっていた。

「成る程 大体分かった」

「それでは行ってくるがよい、大体のことは教えた。もう儂からは教えることはない、あとは自分の型をつくれれば良い」

師匠は真っ直ぐ俺を見ている。俺は少し笑ってから刀を仕舞い、陰陽玉を取り出した。

「今までありがとうございます！！」

陰陽玉に乗り、天高く飛び立った。

「行ってしまったか もういいぞ」

木の裏から全くの同一人物が現れた。

「（コクン）」

さっきまで悠治と話をしていた老人が白い玉の幽霊になった。

「さて、いい加減出て来てもらおうかの？ 『妖怪の賢者』殿？」

「やはりばれていましたわね」

空間が裂け、一人の女性が現れた。

「貴女ほどの方がこんな場所に何の用ですかの？」

「あの子の様子を見に來ただけですわ。相当力を付けましたわね」

女性は扇子で口を隠し、笑う。

「ただそれだけですわ、それでは御機嫌よう」

「最後に聞く、この異変 あのお方の仕業か？」

「さあ 自分の目で見れば分かることですよ 『魂魄妖忌』さん？」

女性はそういつて裂けた空間に戻って行った。

「 儂が戻れないと知っておるだろ 『八雲紫』 」

く魔法の森 上空く

「霊夢や魔理沙もこの異変には気づいている筈だ、間に合えば良
いんだが」

雪が積もる森の上を、桜が降って来る方向に飛ばして進む。

「あ、悠治だー！！」

「おっとと、なんだチルノか」

目の前にいきなりチルノが現れたので、急ブレーキをする。
反動で危うく陰陽玉から落ちるところだった

「どうしたんだ？こんなところに」

「大ちゃんもルーミアも遊んでくれないんだもん　寒いからいやなんだって」

「まあ　そうだろうな、でも大ちゃんたちが風邪を引いたら嫌だろ？」

チルノは「そっちのほうがいやだ！」と言って強く横に振る。

「チルノは優しいな。それじゃ、俺はこの異変を終わらせに行くから」

「ふーん、ならあたいは他のところであそんでこよう！じゃねー」

チルノは手を振りながら去っていく。
俺も手を振り、見送る。

「チルノは楽しそうだけど、こんな異常気象を放っておく訳にはいかないからな」

向きを変え、再び進むとしたとき、目の前に白い女性が現れた。

「あんたは誰だ？」

「フフ、ただの冬の忘れ物よ　尤も、今年の冬は長いけどね」

女性は静かに笑いながら、
俺を見てくる。

「あんたがこの異変を引き起こしたのか？」

「いいえ違うわ。でも、貴方が冬を終わらせに行くなら貴方を敵と見なすわ」

その言葉でお互いに臨戦態勢に入る。

「私は、レティ・ホワイトロック　冬の妖怪よ」

「俺は、不知火悠治　鳥の言葉を理解する人間さ」

そして、同時に弾幕を放たれた。

「悪いけど、貴方はここで眠ってもらわよ？寒符『リングリン
グゴールド』」

「ここで寝ちまったら死ぬのも同然だな　鳥符『エアロバース
ト』」

互いの弾幕がぶつかり合い、相殺しあう。

「ちょっとはやるようね」

「まだ、お互いに本気じゃないってことが　それじゃ、久しぶりの本気を出してみるか！！」

弾幕を変幻自在に曲げて攻撃する。以前より操る弾幕の量も、曲げ

る角度も高くなった。

「くっ　　甘く見てたわ　　流石、紅霧異変である悪魔の妹を倒した人間ね」

「フランのことが　　別に倒したわけじゃない、家族の絆を守るうとしただけだ」

「お人好し過ぎると痛い目に遭うわよ？今も私に最低限の攻撃しかしてないじゃない」

「ちっ　　ばれたか」

派手に攻撃をしているが、実は殆どがレティの弾幕を消すための攻撃。そこに数発、レティ狙いを混じらせていた。ばれないと思っただけだな

「そんなんで、本気とは言わせないわよ？本気というのはこう言うことよ！怪符『テーブルターニング』！！」

レティの周りから大量の弾幕をばら蒔かれる。

「こりゃーまずいな　　」

「潔く負けを認めなさい！」

「生憎俺は負けず嫌いなんでな　　音符『ソニックバード』！」

自分の周りに弾幕を展開し、一気に飛ばす。

「こんなところで負けるかよー!!」

） 三人称 S i d e （

） 同時刻 博霊神社 （

「 霊夢 「

「 「

「 いい加減に動けよ!!」

魔理沙は炬燵で寛いでいる霊夢を怒鳴るが、霊夢は一向に動こうとしない。

「なあ、これ絶対異変だぜ！？博霊の巫女が動かなくてどうするんだぜ！！」

「嫌よ、外は雪が積もっているしそのうち元通りになるでしょ」

霊夢はそう言いながら炬燵に踞る。

「霊夢は分からないと思うけど、私には胸騒ぎがするんだぜ」

「胸騒ぎ？私は寒くて鳥肌は立つけど？」

魔理沙は霊夢に呆れながら、障子を開ける。

「ちよつと寒いじゃない！！」

「外出てみる、何か気付かないか？」

霊夢は嫌々ながらも外の景色を見る。

「おかしくないか？残冬なら少しは木々に蕾ぐらいあっても良いはずなのに、それが無い。まるで春がないみたいじゃないか？」

「」

霊夢は小さく笑い魔理沙の顔を見る。

「今回は魔理沙に賛成ね。ほら、出発するわよ」

「了解だぜ!!」

霊夢と魔理沙は異変の準備をしに中に戻って行った。

〈悠治Side〉

〈再び魔法の森上空〉

「はあ はあ あつぶねえ」

「全く 本当にお人好しね」

今俺は落ちるとこだったレティの手を掴んでいる。

「自分が攻撃した敵を普通助けるかしら？」

「こんなところから落ちたら妖怪でも危ねえだろ 俺は相手を攻撃しても命まで取らねえ 俺には人を殺める理由がないし、あつてもやらねえ」

「ありがとう、もう大丈夫よ」

レティの手を離して、自分の力で浮く。

「貴方、悠治って言ったかしら？覚えておくわお人好しさん」

「それ定着させようしてるのか？」

「ふふ、事実じゃない。さてと そろそろ冬は終わりそうね、私は春眠の準備でもしましょうかしら」

レティは「また冬に会いましょう」と言ってから一礼をして、俺の前から遠ざかっていた。

「っ！ やっぱ無理しちゃいけねえよな」

全身に痛みが走り、膝が付きかけるのを堪える。

「弾幕の中に飛び込むなんて馬鹿なことやるよなあ俺」

体勢を立て直し、深呼吸をする。

吐いた息が白くなり薄くなつて消える。

「はあ よし、体は動くしまだまだいけるな」

桜が舞ってくる方向を確認し、俺は陰陽玉を飛ばした。

十五話・桜と雪（後書き）

白岩さんってこんなキャラでしたっけ？

どうもキャラが掴めない　今後も原作と違うところが増える予想

それでは、誤字などありましたら感想にて。

十六話・過去は変えられない(前書き)

今回はいろいろとカオスです

そしてそんなに書くことも無いという
何で二話分に別けなかったのかな 自分

十六話：過去は変えられない

桜が舞ってくる方向に進んで数十分が経過した。

「此処まで来ると雪が少なくなってきたな」

周りを見ればさっきまで雪景色だったのが、少しずつだが緑の葉が増えてきた。

でも、此処も桜は咲いてないか

「それにしても」

陰陽玉から下の風景を見る。

「この辺りで弾幕勝負があったみたいだな　しかも俺が知っている人達が」

下にある木々が何かに薙ぎ倒された跡があった。

「もしかしなくても魔理沙のマスタースパークだな　いつも派手だなあ、あいつらしいしんだけどさ」

そう言いながら下を見ていたら、視界に人影らしきものが写った。

「君は？」

「つ、次は負けない！」

服がボロボロで頭に獣の耳が生え、緑の帽子を被った少女がいた。

それに尻尾も生えているし妖獣かな？

「その傷、大丈夫か？」

「近寄るな！！」

俺を強く睨みつけ、近寄らせないようにしている。
でも、傷が心配だな

「別に攻撃なんてしないよ、君の怪我が気になるんだ」

「そんなの関係ない！次こそ勝って八雲の姓を貰うんだ！！」

八雲？何処かで聞いたことあったような　　って、いきなり攻撃！？

「もらっ（ズキッ）痛っ　！？」

「ほら　　言わん請っちゃない、その傷じゃ無茶だ」

痛みで体勢を崩した少女を受け止める。

「は、放せ！！」

「俺は何もしない、信じる　　な？」

じっと少女の目を見る。

少し分かったのか、睨みつけつつも殺気は消えた。

「怪我　　見せてくれる？」

「
」

無言ながらも少女は怪我をした部分を見せてくれた。
俺は陰陽玉に靈力を注ぎ込み、倍の広さにして座らせる。そのあと
荷物の中から傷薬等を取り出し手当てをする。

「ところで君の名前は？名前が分からないと話しづらいからさ、
少し染みるよ？」

「っ！！
橙」

「橙ちゃんか、俺は不知火悠治って言うんだよろしくな」
自己紹介をして再び橙ちゃんの手当てをする。

「応急処置程度しか出来なかったけど大丈夫かな？」

「はい、ありがとうございます」

「そっぴや何で勝負を挑んできたの？」

その質問をすると、橙ちゃんは強い眼差しで俺を見た。

「強くなって藍様に認めてもらいたいからです 一人前の式とし
て でも返り討ちにされちゃいましたけど」

「（この子は所謂式神っていうやつか） 橙ちゃんはその人が好
きななの？」

「はい」

橙ちゃんは笑顔で答える。凄く好きなんだな、その藍って人が。

「なら焦らなくても良いんじゃないかな？」

「何ですか？」

「少しずつ強くなって行けばいい、橙ちゃんは俺より生は長いんだからさ。だから今は強くない君でも良いと思うよ」

「でも」

橙ちゃんは俯いた。膝の上の小さな手は握りしめていた。

「それじゃ、少し昔話でもしようか」

今から数年前、俺が中学生の時の話した。

〈中学生時代 六月〉

俺はいつも一人だった。いや、自分から一人になっていた。別に攻撃的な避け方はしていなかった、ただ人の輪に入ろうとしていなかっただけ。

ある日、俺は河原の土手に座り込んでずっと川を眺めていた。

「分かつているさ、俺は恐いんだ 俺のことを知られたら絶対に裏切られる それが恐いだけなんだ」

俺が俯いていたとき、後ろに誰かの気配がした。

「そんなところで何たそがれているんだい？少年」

後ろを向くと、一人の女性がいた。髪は綺麗なエメラルドグリーン

で変わったヘアピンをしている。服装は近くの高校の制服のようだった。

「高校生が何の用ですか　それに俺はたそがれてなんか」

「つれないねえ、君が此の世の終わりみたいな顔をしているから私が救ってあげたのに」

「そんな顔　多分していません」

俺はまた俯き、口を閉じる。

「」

「はあ　よいしょっと」

女性が俺の脇に座ってきた。

「ねえ君ってさ、他の人とは違った特殊な能力を持っているでしょ？」

「!?!?」

突然の言葉に俺は驚いて目を丸くした。

「な、何でわかるんだ？」

「そりゃ簡単なことさ、私は　!?!」

「うわっ!?!?」

急に腕を引つ張り女性は自分の身体に密着させる。
ちよ、胸が

「は、離せよ！」

「あと十秒耐えれば離すって」

少ししたら俺を離して謎の紙をバックから取り出した。

「何だよその札みたいなの　って何だよあれ!？」

川のところに見たこともない生き物がいた。そして、さっきまで俺がいたところには何かがぶつかつた跡があつた。

「何回驚いているのさ」

「普通驚くだろ!!何なんだあれ!!」

「ただの下級妖怪よ」

妖怪!?!漫画とか怪談とかで出てくるあの妖怪か?てか、妖怪に上
下があるのか!?

「ウヴァ〜」

「最近の水難事故はこいつの仕業だね、さあてさっさと終わらせ
ようか。」

少年、私の後ろにいるんだぞ」

「ウヴ〜 ヴァ！」

妖怪が水の球を俺達に飛ばす。

バシヤツ

「うわっ！！！」

目の前で水しぶきが立ち、無意識に目をつぶって顔を守っていた。

「う あ、あれ？」

目をあけたときには女性はいなくなり妖怪の方も探しているようだった。

「こっちだ妖怪！」

女性はいつの間にか妖怪の背後上空に回っていた。そして妖怪に札を張り付ける。

というか人間ってあんな高さまで跳べるのか？

「私に勝つなんて千年早いわ！『滅』！」

「！！！」

妖怪は聞き取れない断末魔を叫びながら消えていった。

「」

「あちゃー、制服濡らしちゃった。ん？何ジロジロ見てるのよ？」

目の前で起きたことが何だったのか　俺はただ啞然とするしかなかった。

「えっち」

「はあ!？」

不意に言われた言葉に声が裏返る。

「それよりあんたは何者なんだ？さっきの化け物も」

「それを知りたいきゃ、明日また此処に来なさい」

女性は俺に背を向けて歩いていった。

「あ、君の名前聞いてなかった、何て言うの？」

「不知火悠治だ」

「悠治か、いい名前だね、私は『東風谷茜』あかねまたね悠治」

茜さんの後ろ姿見届けた後、自分も帰路についた。

翌日、言われた通りに同じ場所に居た。

「お、ちゃんと来たんだ。居ないと思ってたのに」

「何で俺の力を分かったのか知りたいからだ」

「とか言って私に好意でも有るんじゃないの？」

「な、ちげえよ!!！」

からかってくる茜さんを怒鳴るが、ニヤニヤしながらあしらわれてしまう。

「それじゃ立ち話もあれだし、そろそろ行こうか」

「何処に行くんだよ？」

「ついて来ればわかるって」

少し疑問に思いながらも茜さんの後に付いて行った。

少年・少女移動中

「此処って 神社？」

俺が案内された場所はそれなりに大きな神社があった。それと俺より小さいくらいの巫女服を着た少女が掃除していた。

「そう、私の家でもあるけどねえ」

「へえ」

「あり？驚かないんだ、てっきり突っ込まれるかと予想してたのに」

「何となく分かってたし」

と言いつつも内心、俺は驚いていた。回りを見渡ししていると、茜さんは本殿の方へ歩いていった。

「早苗ーあいつのこと少し頼むね」

「ん、分かった」

回りを見渡してたら、さっき掃除をしていた少女が俺の前に来た。

「君は？」

「私、東風谷早苗と言います。茜お姉ちゃんの妹です」

「俺は不知火悠治、〇〇中に通っている学生なんだ」

「ということとは私より上なんですな。私、まだ小学生ですから」

小学生の割りにはしっかりしている子なんだな。下手すると俺よりしっかりしている。

「ところでお兄さんって「そいつは能力持ちだよ」「あ、お姉ちゃん」

顔を上げると、早苗ちゃんと同じ巫女服を着た茜さんがいた。

「なあ、その能力持ちって俺のことを言っているんだよな、何で知っているんだ？」

「私達も似たような能力を持っているから何となく分かるんだよね、因み悠治はどんなの？」

「鳥と話せる、鳥類だったら殆ど言葉は理解できる」

「わあー 凄いですね」

「それって意識を集中したりすると出来るの？」

「いや、ほぼ無意識で理解出来るな」

尊敬している早苗ちゃんとは逆に茜さんは啞然とした顔をしている。

「どうしたんだ？」

「驚いたよ こういう奴、私等以外にいるんだ」

「で、似たような能力って言ってたけど、実際どういうもんなんだ？」

次は俺から質問すると、茜さんは頭を掻きながら「うーん」と唸る。

「まあ私や早苗は神とかが見えるってのが実際の能力なんだよね、あんたと同じで意識しなくてもね」

「あと、お姉ちゃんは妖怪退治をやっているんです」

「昨日見たいに人に害を為す妖怪を倒すのが私の役目なのさ」

服から札を取り出して俺に見せる。

同じ大きさだが一つ一つ違った模様が描かれている。

「あ、いけないいけない忘れるところだった」

「どうかしたの？」

手に持っている札を仕舞って、違った物を俺に差し出した。

「何だそれ？」

「お守り見たいですね」

俺も早苗ちゃんも、茜さんが持っている物に首を傾げる。

「これを持っていれば妖怪から身を守れる退魔の札が入っているお守り」

「なんで俺に？」

「妖怪の中には力を欲しがらぬ奴らがいるの、そういう奴は人間を喰らって強くなるうとするの、私等みたいな力を持った人間を喰らうとより強くなるのさ」

「で、俺は狙われやすいから持っている」と

「そゆこと、肌身離さずね」

茜さんからお守りを受け取り一先ずポケットに仕舞う。

「あとで首に掛けるようした方がいいかな」

「その方が良いかも知れませぬ、お姉ちゃんのお札の効果は折り紙つきです」

「そりゃ私が作ったんだから、まあ当たり前でしょ」

腰に手を当てて鼻を高くしている茜さんを俺は素直に尊厳していた。

「普通にすげえよ、ありがとう茜さん」

「良いつて良いつてもっと褒めなさい」

「もう、お姉ちゃん調子に乗りすぎ」

『ハハハ（フフフ）』

境内に三人の笑い声が響き渡る。

その後、境内を案内をしてくれると日もかなり落ちていた。

俺は二人に別れを言い、神社を後にした。

〈現在〉

「 というのがその人との出会いなんだ」

「 そのあとどうなったんですか!？」

途中から俺の話しに興味が湧いたらしく、尻尾を振り、目を輝かせている。

「 それからはよく神社に遊びに行くようになったし、たまに術式の実験台にされてたけど 」

「尚更興味が出て来ました！」

「それじゃ、本題の話しをしようかな」

深呼吸を一回して、再び話しを進めた。

〈《過去》とある山道〉

茜さん達と出会って二、三ヶ月ぐらい経った夏休み、俺は山にハイキング兼妖怪退治に行くことになり、現在山を登っていた。

「ハイキングなのは分かるけど、何で俺も妖怪退治に参加しなきゃいけないんだ」

「別に良いでしょ？あんだだっけ強くなっただけ言っただじゃん」

「まあ 言っただけどよ」

あの日から数日経ったとき、茜さんは俺には霊力を扱う才能があるとか言われ、特訓させられていた。

と言っても俺が今日までに出来たことは、手に持っている物から霊力を僅かに放出させることぐらいしか出来ない。手から離れたらすぐ消えてしまう。

「考えてみたらまだ未熟過ぎるな」

「そう言わない、何のためにそれを持たしているの？」

それ、と言うのは手に持っている短刀である。護身用とかで持たされていた。短刀といっても刃はそれなりに長く鋭い、妖怪を切る為だがこの鋭さなら人も切れるだろう。（それは流石にやらんけどな）

「俺、銃刀法違反だよな」

「大丈夫だって、ばれなきゃ良いんだから」

「めっちゃ不安」

陽気に笑う茜さんに呆れて溜め息をはく。

「そんな顔をしない、自分の力を信じなさいな」

「（信じる　か、この力は自分の為に使うのはよそう、誰かを
守れるくらいの力はあるはずだ）」

「なら私のこと守ってくれるの？」

「なっ!?!?!/読心術か!?!」

思っていることを言われて、流石に恥ずかしくなる。

本当に茜さんは何でも有りだよな。

「なあに?それ私に告白でもしたの？」

「馬鹿か!?!んな訳ねえだろ!?!」

「照れなくても良いって、もう可愛いんだからあゝ」ギョッ

「!?!?!」

茜さんは俺に抱き着き、胸に押し当て頭をワシャワシャ撫でられる。
これは茜さんのスキンシップらしいんだが、度が過ぎてる。

スキンシップ以外に、可愛がったりするときも癖があるようだ。
今みたいにな。

「くる　し　い　っ　て　!?!?!」

「もう、本当に悠治は可愛いなあ」

「最近かなり酷くなってるぞ！」

二週間くらい前から俺に抱き着くことが多くなり始めた。

最初は早苗ちゃんにやっていたが（嫌がっていたけど）、次第に矛先が俺に向けられていた。

「なりふり構わず抱き着くのやめてくれよ、やられてるこっちが恥ずかしくなる」

「その続きを期待してるのかしら？」

「んなっ!？」

ダメだ、完全に茜さんのペースにのせられてる　のせられないようにしないといめんどくさくなる。

「いい加減先を急ごうぜ、早くしないと下山の時間が無くなっちゃう」

「　　ねえ、悠治」

「何だよ？」

ぶつきら棒に返事しながら後ろを向くと、また抱き着いてきた。が、いつものようなやり方ではなく、優しく抱き着いてきた。

「な、何だよいきなり!？今度はどんな」ありがとう　「って

え？」

「何時も私のわがママを聞いてくれるよね、何でなの？」

「何でって、別に深い理由なんてねえよ。俺が役に立てる事がそんなくらいだからと思うから、今日もそんな感じだ」

そう答えるが返答がない。もしかして怒らせちゃったかな？

「そうなんだ その理由ってどんなの？」

「そりゃあ親友の為にって思っているけど 何だよ俺になんかあるのかよ」

「う、うん 私ね、「待った」？」

茜さんを放して、意識を集中して回りを見渡す。

「どうかしたの？」

「おかしい、鳥達の声が消えた」

「え？でも鳴いてるよ？」

確かに鳥達は『鳴いている』、ただだ。
声すら聞こえず、この鳴き声は只の音だ。

「俺にはこんなのは効かない、なあこれやばいぞ」

「そういうことか、私達は『奴』にやられたのね」

俺達が此処に来た理由は、最近この山で遭難事件が多発している。原因はこの地に住み着く妖怪の仕業らしい。そいつを倒すために来たと言うことだ。

「幻覚を見せる能力を持つ妖怪ねえ、予想外にメンドイかも知れないな」

「俺はどうすれば良い？茜さんのこれがあるから大丈夫だけどよ」

「茜でいいよ。悠治は山を下って人が入らないようにして、私は奴を見つけたから」

「了解、茜さ 茜、下で待ってるからな」

「待って！」

走り出そうとしたとき、茜に呼び止められたので振り向く。

「約束して 私、悠治に伝えたいことあるから」

「分かった、約束する」

俺は急いで山を下りだした。

「ダメだ 抜け出せねえ」

下山してから三十分ぐらい経っただろうか、未だに麓まで来ていない。寧ろ山の奥まで来ているようだった。

「くそ 範囲が自分から2mだけだからな ぐあっ！」

首に掛けているお守りを握っていたら突然現れた木の枝にぶつかり、倒れ込んでしまった。

「いつつ あ、急がねえと」

急いで立ち上がり、麓を目指して走り出す。

山道を通っても幻覚で意味がない、幸い傾斜が緩やかだし茂みを突っ切る方が早い。

「悠治！！」

「！？」

聞き覚えのある声に呼び止められ、聞こえた方を振り向く。

「茜！なんで此処に？」

「あの妖怪を殺ったのよ」

「本当か！ で、今聞くが伝えたい事って何だ？」

「ん？あ、ああ　あのことね　ええっと　」

『ガサッ』

後ろから物音し、妖怪らしき生き物が現れた。

俺は直ぐさま妖怪との距離をとり、短刀を取り出す。

「生きていたのか！クソッ！」

「　　！！！」

「何を言ってるのか分からねえが、手負いなら俺だけでも！！！」
鞘から抜き切尖を向け、妖怪の懐目掛けて飛び出した。

「はあああああ！！！！！」

俺は妖怪の胸元刺した。

そのはずだった。

「ゆうじ」

「!!!?」

俺が刺した相手は妖怪ではなく 茜だった。

「な　なんで茜が　どうして」

慌てて短刀を抜く。茜は力無く俺の肩に寄り掛かる。

「ガツガツガ!!! 愚力ナ人間ヨ、我ノ幻覚ニ騙サレ仲間ヲ刺シオ
ツタワ!!!」

嘘だ 俺が

「所詮八人間、我二八勝テ又！！我ノ力ノ前デ八全テガ無力！！」

俺が刺した 信じてくれた人を 俺が 俺が

「 気が済ん だかい？ 妖怪 」

「チイ シブトイ奴ダ、死ニ損ナイガ！！」

飛び掛かってくるに一枚の札が当たる。

「私の 可愛い弟分 に、手を出す とは 地獄を 味わいな
さい！『滅』！！」

「ガアアアアア！！馬鹿ナ我ガ人間ゴトキニイイイイイ！！」

断末魔を森に響かせながら消滅していった。

「ふっ 千年早いつ ての ゆ 悠治？大丈夫だった？」

「ひっ!」

「だ いじょうぶ だって、怒ってない から 良かった 怪
我はしてないね」

「何で 避けなかったんだよ 避けてりゃ 茜は あかね
は」

必死に涙を堪えながら問うが、茜は「別に良いじゃない」と言う

「それに これ 落としてたぞ」

「あ お守り」

「落とすんじゃないの でも そのお陰で 悠治を守れたんだ
し」

「でも そのせいで俺は 茜を」

俺を優しく抱き「私はそれで良いの」と言ってる。

「一先ず 山を下りま しょう 悠治、肩 貸して」

「分かった 後で理由聞かしてもらうからな それに、ぜって
え助けっからな!」

「ん」

茜の腕を首に回し、出来るだけ負担を掛けず且つ急いで下山した。

（現在）

「そのあと病院って場所で手当てされたんだけど、出血が酷くて
な」

「その茜さんって人、亡くなっただんですね」

「俺があのとき無くしてことに気付いていれば」

手を強く握りしめると、隣の橙ちゃんはビクツと怯えた。

「あ　ゴメン、恐がらせちゃったね」

「い、いえ大丈夫です。お兄さんって凄いですね」

「全然凄く無いよ、でも俺は一生この罪を背負って行くって決めたんだ。橙ちゃんみたいなのは俺みたいに大切な人を傷つけたり悲しませたりしないようにね」

俺は自然と橙ちゃんの頭を撫でていた。

「あ、ゴメン嫌だった？」

「にゃ〜　気持ちいいです〜」

ゴロゴロと喉を鳴らしながら手に擦り寄ってくる。式といっても猫なんだな。

「ちえーん！ちえーん！」

「あ、藍様だ！」

「橙！やっと見つけた」

藍と呼ばれていた人は、俺ぐらいの身長で金髪で短く、九本の狐の

尻尾を付けていた。それに結構な美人だ。

「橙、その絆創膏どうしたんだい!？」

「そこのお兄さんに手当てしてもらったんです」

「君は？」

「ああ 俺は不知火悠治、その傷は俺の友達がやったんだ 俺から謝る、すみません」

「君が いや、君が謝ることはない、寧ろお礼をさせてくれ」

俺に一礼すると、橙ちゃんも釣られて一礼した。

「橙を手当てしてくれてありがとう、私は八雲藍、紫様の式だ。君のことは紫様から聞いていますよ」

「何で俺のことを？」

「それは君を幻想郷に連れて来たのは紫様だからな」

「あつ!?!」

思い出した!あのとき俺を変な次元に落っことした奴、あの人が紫という人か

「すまないな 紫様がいきなり連れて来てしまった」

「別に良いよ、今はこの幻想郷が俺の居場所だ。それに大切な友

達もいるし」

「そうか　なら良いんだ、本当にすまないな」

「もう過ぎた事だし良いって。

さあって　そろそろ行くか」

体を伸ばしてから陰陽玉を一人分の大きさ戻す。

「橙ちゃん、大切な人を悲しませないようにね」

「はい！」

桜の舞ってくる方向を確認し、陰陽玉から霊力を放出して飛び立った。

十六話：過去は変えられない（後書き）

今までで一番長い文字数となりました。
これを抜くことはあるのかどうか

そして此処でキャラ設定を

名前：東風谷 茜（こちやあかね）

年齢：女性に年齢はNG（高校の年齢です）

能力：札を扱う程度の能力

東方風神録の登場キャラクタ東風谷早苗の姉という設定。飛翔録第二のオリキャラ

東風谷家の中でもトップクラスの能力者。なのだが、東風谷家一のお気楽者で何かと遊び半分な所があり、妖怪退治もゲーム感覚でやってたりする。因み早苗と同じで風祝である。

何故オリキャラを出したかという点、時代的におかしくなるかと思っただので、勢いでやってしまいました

誤字など有りましたら遠慮なくどうぞ！

十七話・庭師の剣士（前書き）

新年初投稿！！

そして謎&超展開！？

そこまで超展開って訳ではないですが、謎の展開なのは確かです。

十七話：庭師の剣士

「結構なところまで来たな」

舞う桜遡って行ったら、いつの間にかかなり高いところまで来てしまったようだ。

「どこまで続くん（ガツ）だ!？」

陰陽玉が何かにぶつかり、俺は空中に放り出された。

「うわあああああ!?!っいて!」

そのまま落ちると思ったが、どうやら地面に打ち付けられたらしい。

「いってえいきなり何だよ」

体を摩り、辺りを見る。どうやら地面にぶつかったようだ。（何故地面が浮いてるのは幻想郷だからと考えとこう）
下は石畳でひんやりとして冷たく、肌寒い。さらには何処まで続いているか分からないくらい石段があった。

「唯の肌寒さじゃないよな　ってあれ!?!無い!陰陽玉が無い!」

何処を探しても見つからない、服やズボンも調べるがあるはずもない。

どうやらぶつけた拍子に落としたようだ。

「くそお これ登るのかよ 　　しかなねえ、行くか 　　」

溜め息をはき、石段を見上げながら登って行った。

少年移動中

「ふう 　　結構登ってきたつもりなんだがな 　　まだまだか 　　」

休憩スペースのような場所で息を整え、見上げる。頂上はまだ先にあるみたいだ。

「にしてもさっきまで襲ってきた幽霊は何だったんだ？ 弾幕効いたから良かったけどよ、群がると厄介だったな 　　倒しても倒しても減らないし、弾幕撃って来るわで疲れた 　　」

でもこんなところで立ち止まってなんかいらねえ、霊夢や魔理沙も戦ってたんだ 　　急がねえと。

気合いを入れて再び石段を昇って行った。ある程度登っても幽霊の攻撃はなく、順調に進んで行けた。

「うっ 　　桜が凄く来るな 　　」

上の方から大量の桜の花びらが散ってくる。そして頂上付近に一人の少女がいた。

「こんなところに人間が来るとは、あの結界を越えたのか」

「何者だあんた？」

俺より低く、銀色の髪に緑色のリボン、二本の刀を帯刀、それより一番目立つのが横を浮遊する霊だ。

「まず、自分の名前を名乗るのが礼儀だと思いますが　まあ良いでしよう、私は魂魄妖夢」

「俺は不知火悠治、悪いがそこを通らせてもらいたいんだかな」

「此処がどんな場所か知っててこの先に行くത്？」

「どういうことだ？」

俺の発言に妖夢と言う少女は鼻で笑う。

「滑稽ね、良いでしょう行かせてあげる」

「そうか、それは助かる」

「そう　霊体となつてね！！」

妖夢は刀を抜き、俺に切り掛かって来るのを刀で防ぐ。

ガキンッ！

高い金属音が回りに響き渡る。

妖夢の攻撃を弾き返し、互いに距離を取る。

「抵抗したら一瞬でやれないじゃないですか」

「まだ死にたくねえんだけど、生きたまま通らせてくれないかな？」

「幽々子様の計画の為、此处を通すわけには行かない」

「その計画とやらで春が奪われたのなら尚更だ、春を返してもらわねえとな」

服から一枚のスペルカードを取り出し、カード名を唱える。

「舞え、鳥符『エアロバースト』！」

右回転と左回転の螺旋状に弾幕を撃ち、確実な被弾を狙う。が、妖夢は軽々と躲していく。

「このくらいで怯むとでも思った？こんな弾幕、楽に躲せる」

「なら躲せないようにすりゃあ良い」

妖夢が躲した弾幕を操り、方向転換させ、挟み撃ちにする。

「ば、馬鹿な!？」

「前だけ見すぎなんだよ、君は」

前後からの弾幕に吞まれ、かなりの数が被弾しただろう。

「そんな簡単にやられる訳ないよな」

「少しはやるようだがこのくらいどうってことない。私の楼観剣は切れぬ物など殆ど無い！」

「まだ本気じゃないってことか」

弾幕の中から妖夢が二本の刀を構えながら現れる。俺の弾幕を薙ぎ払い、弾幕を撃ちながら近づいて来る。スペルを止め、防御体制に移る。

「ていやああああ!!」

「おっと、危な!？」

妖夢の一撃目を防ぐと、もう片方の刀で切り掛かって来るのをぎりぎりで躲す。

「はああああ!」

「ぐっ
「!」

追撃をくらい後ろに飛ばされる。

普通男を飛ばす程の力、あんな細い腕にあるかよ

「（にしても 妖夢って子の剣捌き、どことなく師匠の動きに似ているな まさかな、師匠は人間だし。（人間を超えた動きはしてたが）あれは師匠のオリジナルだからな、刀を使っているから似ているだけだな）」

「来ないのなら此方からいかせてもらおう！獄神剣『業風神閃斬』」

妖夢を中心に、大玉の弾幕を薙ぎ払いながら撃って来る。

「簡単だが 油断は禁物だな」

「躲せるものなら躲してみろ！」

大玉の弾幕が無数の小さい弾幕に変わり、襲い掛かってくる。

「な！？密度が高すぎる！」

こんな弾幕じゃ 避けようにも地上じゃ小回りが利かないし、飛ぶにも隙が生じるし飛べたもんじゃないな。

「なら 音符『ソニックバード』！」

「悪あがきか 何処まで耐えられるものなら耐えてみる！」

「耐えないよ、この壁を撃ち抜くだけだからな」

妖夢の弾幕を避けつつ手の上で生成した鳥型の弾を放つ。放たれた弾は弾幕を消し去りながら突き進んで行き、続けて何発も放つ。妖夢も大玉を撃ち、大量の小型弾幕に変わり、攻撃し続ける。

「人間ごときがこんな強さを持っているなんて　だが人間だ、
いつまでも抵抗は出来ない」

「　ああ、その通りだ　このスペルは消費が激しい　でもな、
俺は負けられねえんだ！！」

（魔理沙 Side）

「近いわ、それに悠治と二つの気が感じられる。多分、二つの内一つがこの異変の首謀者ね」

「悠治がか!？」

「あの彼がね」

霊夢の言葉に私と吸血鬼のこのメイド長が反応する。

「ええ、悠治は私たちより先に行ってたようね」

「少し前にまだ追い付いていないって言ってなかったかしら?」

「それは魔理沙のせいなのよ、あんたが寄り道しすぎなの」

「私なのか!？」

此処に来るまでに人形使いやら騒霊の三姉妹やらと勝負していただけだ。何で私のせいになるんだ?（因みメイド長はついさっき合流したんだぜ）

「まあいいわ、さっさと異変終わらせましょう」

「な 言いたいこと言ってそれかよ」

「もう過ぎたことなんだし」

「そうね、紅魔館の燃料が尽きそうだし早く終わらせたいものね」

そう言つて二人は先に飛んで行つた。私は納得がいかないけど二人の後を追うように飛んでいく。

「霊夢、何か来るわよ」

「何かしら、人ではないようね？」

「二人ともどうしたんだぜ？」

霊夢たちが見上げている方を見ると、丸く平べったいものが落ちてきた。それは悠治がいつも使っている陰陽玉だった。私はその陰陽玉を手にとり、霊夢たちに見せた。

「これ、悠治のだよな」

「間違いないわね、てことはこの先で間違つてないわね」

急に嫌な想像が頭を過ぎる。私はいてもたつてもいらなくなつて悠治の元へ急いだ。

「ちよつと魔理沙！どうしたのよ！」

「私たちも急ぐわよ」

「あ、待ちなさいよ！」

（悠治Side）

「はあ はあ 何故だ、何故私が押されている」

「修行の お陰 かな？」

妖夢が押されていると言ってもお互い弾幕を撃ちすぎた為、動きが鈍くなってきた。正直、後一枚だけだな スペルカード発動
出来んの

「（もう弾幕は無理ね　でも弾幕が無理なら）　はああああ！」

「弾幕が無理なら接近戦しかねえ！」

お互い粗同時に飛び込み刀が交わる。刀が交わる度に周りには高い金属音が鳴り響き続けた。

「はっ！！」

「そんなの　そこだああ！」

「おっと！」

俺の攻撃を躲され反撃される。それをバックステップで躲す。後ろは床は無く、下も見えない奈落だ。

「そのままだと、落ちて死ぬぞ？」

「そうならねえ　よっと」

「！？」

足に靈力を込め、空中を蹴る。蹴った反動で妖夢の上を取ることが出来た。

約一年の修行の中で俺が身につけられたのは之がやっとだった。

「おらああああ！！」

「ぐあっ！！」

体を曲げ、側宙しながら刀を振り下ろす。妖夢は防ぐものの衝撃で飛ばされる。

俺は不格好な着地をするが、直ぐさまスペルカードを取り出す。

「これでラストだ！切り裂け 迅符『七四七・武迅』！」

刀に靈力を込め、妖夢に向けて斬撃を大量に飛ばす。飛ばした斬撃は分裂し、鳥型の弾幕に変わる。

「っ！！こんのおお！！」

「悪いな、王手だ」

妖夢が弾幕を躲している間に、刀を十字に切り、目の前に十字の弾を作る。それに手を翳して放つ。

放たれた弾は、一直線に妖夢に向かって行った。

「っ！？しまっ！！」

直撃をくらい吹っ飛ばされ、地面に叩き付けられる。

「う あ」

「気絶しちまったか 無理もないか」

ふらつく足取りで倒れている妖夢に近付き、腕を掴んで担ぐ。

「さて 先を急ぐか」

「ゆうーーーーじーーーー!!」

聞いたことのある声に呼ばれ、後ろを振り向く。振り向いた先には魔理沙が凄い速さで此方に飛んできた。

「やっぱり悠治だった」

「魔理沙、もう一年近く経ったな、一人なのか？」

「いや、霊夢たちと一緒にだぜ」

「魔理沙ー！待ちなさいよ!」

下の方から霊夢らしき声が聞こえ、見ると、霊夢とメイド服の咲夜がいた。

「咲夜もか」

「ええ、お嬢様に燃料が尽きそうだから何とかしなさいってね」

「それで？悠治はそいつをどうするの?」

俺が担いでいる妖夢を見て、霊夢が質問してくる。

「まあこの子は上まで送って行くさ、それよりまだ異変は終わってないんだ　俺はこの通りボロボロだ　だから後は三人に任せてもいいか?」

「言われなくてもその気よ、そんな体について来ても足手まといだし」

「ははっ　　そうだな」

「」

霊夢と咲夜は飛び立つが魔理沙は黙ったまま動こうとしなかった。

「魔理沙、行くわよ！」

「ごめん、先に行ってくれないか、後で追い付くから」

「　　はあ、さっさと来なさいよ」

そう言って二人は先に行ってしまった。

「どうしたんだ？俺に何か用か？」

「」

「なあ　　黙ってたら分からないだろ？」

帽子を深く被り、顔を見せようとしない。少し心配になり魔理沙に近付く。

「　　魔理沙？」

「ひゃっ！？／／／／そ、そうだった、これを渡そうしてたんだぜ！／／／／」

そう言って持っていた陰陽玉を渡される。

「落ちてきたから拾っておいたんだぜ／＼、それじゃ悠治、上でな！／＼」

「あ、おい！魔理沙！！」

魔理沙はそそくさと飛んで行ってしまった。

「魔理沙、何で涙目だったんだ？」

ちゃんと顔を見れなかったが、確かに目が潤んでいた。理由は分からないが後で聞けば良いし、今は頂上を目指すことにした。

少女を担いで移動中

「やっとか 長かった」

登り始めて数十分、いくら軽い女の子でも今の俺にはきつい途中からは妖夢を背負って少しでも楽な状態で登ることにした。そして今は頂上一步手前にいる。

「はあ はあ 着いた やつと」

最後の一段を登りきり、顔を上に向ける。そこには大きな和風の屋敷と桜の大樹が目映った。

その下には霊夢たち三人と青い服の一人の女性が立っていた。

「あらあ？来たみたいよお？」

「やっと来たか　待ちくたびれたわよ」

妖夢を下ろし、彼女の腕を俺の肩に回して担ぐ。

「ごめんな待たせちまつ　つつ！？」

突然突き飛ばされ、よろける。

そこにはさつきまで気を失っていた筈の妖夢が俺の刀を握っていた。

「貴様　何故私を此処まで運んで来た！？」

「理由がなきゃいけないのか？理由がないと助けちゃ駄目なのかよ？」

「っ！！？　私を何処まで虚仮にする気だああああ！！」

俺に切っ先を向けて突っ込んで来る。

三人称Side

「!?!」

「ガハツ　これで　気が　済んだか　？」

「え？　!?!？」

妖夢が持っている刀は、悠治の体を突き抜いていた。

「（ふっ　何かあの時に似ているな　）」

体から刀が抜かれ、悠治は力無くその場に倒れる。

「「悠治!!」」

「妖夢！」

霊夢たち三人は倒れた悠治の方へ、妖夢の方には主の西行寺幽々子さいぎやうじゆうけいが駆け寄る。

「あ ああ」

「妖夢、刀を降ろしなさい」

幽々子は強く握り締めている妖夢の手をそつと手を当て、ゆっくりと降ろさせる。

「ゆ、幽々子さま 私はどうしたら 分かりません」

「落ち着きなさい、私にも分からないわ 何故あんなことしたのかしら」

震えている妖夢を抑えながら幽々子は悠治の方を見る。

「おい悠治! しっかりしろ!!」

魔理沙は悠治の傷口を必死に抑えるが、出血が収まるどころか酷くなっていくばかりだ。

「わりい 足が動かなかった」

「あんた馬鹿なの!? 喋らないの!」

「魔理沙」

「な、何だぜ？」

悠治が魔理沙の耳元で一言囁く。

「」

「!!!？」

魔理沙は悠治に言われた意味が分からなかった。

「何なんだぜ どうゆう意味なんだぜ！？悠治！！何だよ」
「ありがとう」って！！

意識が無くなる直前に悠治は温かい何かを感じた。逸れが何だったのか、彼は知らない。

十七話：庭師の剣士（後書き）

ある意味超展開？

そして悠治は助かるのか！？

何故か妖夢の口調が安定していませんでしたね

誤字などありましたら遠慮なくどうぞ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4806t/>

東方飛翔録

2012年1月12日11時45分発行